

ドラマの方言

佐藤未依奈・宋歌・菅野連

1 はじめに

近年、日常生活のいたるところで方言を目にする。これは現代における方言が社会のさまざまな場面に進出し、実践的に使用されることが多くなってきているためである。実践的な方言使用の例としては、方言の商品化や方言揭示物などがあげられるが、そのひとつにテレビドラマ(以下、ドラマ)における方言使用がある。ドラマで使われる方言は、制作者が現実の方言を基盤として作りだした、いわば仮想的な方言といえるものである。この仮想的な方言を田中(2011)は「ヴァーチャル方言」と名付け、以降、さまざまな創作物におけるヴァーチャル方言の研究がなされてきた。その中でも代表的な田中(2011, 2016, 2021)では、NHK大河ドラマ作品に繰り返し登場する坂本龍馬・西郷隆盛・大久保利通の3人のキャラクター造形と方言との関係について検討されている。ここで筆者らが主張したいのが、先述の3人のような特定の人物だけでなく、それ以外の人物の方言使用にも目を向け、ドラマ全体を通じた方言使用の実態を明らかにすることも興味深い課題ではないか、ということである。これはすなわち、ドラマの方言の問題には、「ある人物のキャラクターの造形に方言がどう関わるか」ということ以前に、「そもそも、ドラマにはどのような方言が出現するのか」という視点があり、今までさかんに研究が行われてきた前者の視点と同様、後者の視点も重要だと考えるということである。

また、NHK連続ドラマ小説をはじめとする一部のテレビドラマは、方言をはじめとする各地方の魅力を表現することに注力し、人々の注目を集めている。その注目の高さの一方で、ドラマに出現する方言に対する母方言話者の意識に着目した研究は管見の限りなく、十分に行われているとは言い難い。

以上を踏まえ、本研究ではNHK連続テレビ小説『おかえりモネ』(2021年5月17日-10月29日放送。以下、『おかえりモネ』とする)を対象とし、これまで未検討であった以下の課題A、Bについて明らかにすることを目的とする。

課題A. ドラマにはどのような方言的特徴が出現するのか。

課題B. ドラマに出現する方言に対して、母方言話者はどのような印象や意識をもつか。
また、その印象や意識にはどのような要因が関係するのか。

2 調査概要

本研究における調査方法の概要と、本研究で対象とした『おかえりモネ』の概要を記す。なお、以降では前掲の課題Aに関する調査を「調査A」、課題Bに関する調査を「調査B」とする。

2.1 調査方法

2.1.1 調査Aについて

調査Aは、『おかえりモネ』の1話から20話を文字化した文字起こし資料を対象とした。文字起こし資料は筆者らで分担して『おかえりモネ』を視聴し、音声の聞こえに忠実に文字化して作成したものである。この資料を観察することで、『おかえりモネ』に出現する方言的特徴の種類を把握し、その例を収集する。

2.1.2 調査Bについて

テレビドラマの方言に対する印象・意識を調べる方法は、未だ確立しているとは言い難く、本調査はその方法を探索するという側面を有している。調査Bではその一案として『おかえりモネ』で方言的特徴の出現が顕著な場면을複数用意し、場面の映像や文字起こし資料をインフォーマントに視聴してもらったのち、印象・意識を聞き取る方法をとることとした。また、ドラマの方言に対する印象・意識には、方言的特徴の出現の有無だけでなく、母方言や出身地域への好悪や、ドラマのキャラクターを演じる俳優への好悪も関係すると仮定し、それに関する質問項目も用意した。調査Bに関する資料はインターネット上で公開しているため、詳しくはそのファイル¹を参照されたい。

2.2 『おかえりモネ』について

本研究の対象である『おかえりモネ』は、NHK連続テレビ小説シリーズの第104作目のドラマである。宮城県気仙沼市で生まれ育ち、登米市の森林組合で青春を過ごした主人公・永浦百音が、天気予報を通じて人々の役に立ちたいと気象予報士を目指して上京し、その夢を果たしたのち、故郷へ戻り予報士としての能力を生かして地域に貢献する姿が描いている。

本研究で対象とする1話から20話は、2014年の気仙沼湾沖の架空の離島・亀島(気仙沼大島がモデル)と内陸の登米市が舞台となっている。

キャラクターの概要などの補足情報についてもインターネット上に公開している²ため適宜参照されたい。

3 調査Aの結果

『おかえりモネ』に出現する方言的特徴の実態を明らかにすることを目的に行った調査Aの結果を記す。ここでは、まず、調査の中で明らかになった『おかえりモネ』における宮城

¹ 調査Bでは場面の視聴に先んじて、具体的な場面の内容と登場キャラクターの概要を記した「場面紹介シート」をインフォーマントに提示した。その場面紹介シートを「2023_ドラマの方言_場面紹介シート」としてインターネットに公開した。

(URL: https://drive.google.com/file/d/1y_1hVFq9gTbiSEtHQ1V7ZU8fQfH0bx2/view?usp=drive_link)

² 1話から20話において登場回数が5回以上のキャラクターの概要について「2023_ドラマの方言_キャラクター概要」としてインターネットに公開した。

(URL: https://drive.google.com/file/d/1wIN1E59uQri-kJL14-bz_xn0CKIQ8qA-/view?usp=drive_link)

県出身のキャラクターの人数や登場回数、発話回数などの情報を「3.1 『おかえりモネ』の基礎情報」で概観する。次に、現実の気仙沼市方言に存在する方言的特徴の中から『おかえりモネ』に再現されていた方言的特徴を「3.2 音声・音韻項目」「3.3 文法項目」「3.4 語彙項目」の順に列挙する。各方言的特徴の冒頭では現実の方言における特徴の説明と例（東北大学方言研究センター編 2013, 2014、『日本方言大辞典』に拠る）を示し、そののちに『おかえりモネ』中にみられた台詞を引用することとする。

3.1 『おかえりモネ』の基礎情報

ここでは調査 A の結果明らかになった『おかえりモネ』1話から20話に登場するキャラクターの人数とそれぞれの登場回数、発話回数、発話文字数についてみていく。なお、登場回数、発話回数、発話文字数の定義は以下の通りである。

登場回数：キャラクターが1話から20話に登場した回数をカウントしたもの。ここでいう「登場」とは「1回以上発話がある」ということを意味する。たとえば第1話で1回以上発話があったキャラクターは、登場回数を「1」とカウントする。（同一の話数内におけるカウントは「1」まで。）

発話回数：キャラクターが1話から20話に発話した回数をカウントしたもの。ここでいう「発話」とは「1人のキャラクターが続けて話している、発話者が交替するまでの連続した発言」のことである³。

発話文字数：キャラクターが1話から20話に発話した文字数をカウントしたもの。

これらの定義にもとづいてそれぞれの数をカウントし、その結果をまとめたものが表1、表2、表3である（本論文末尾に掲載）。表1は登場回数順、表2は発話回数順、表3は発話文字数順である。宮城県出身のキャラクターは、『おかえりモネ』1話から20話で計70人登場していた。中でも特筆すべきは主人公・百音がすべての表において1位であることである。主人公は物語の中心を担うキャラクターであるため、登場や発話の回数が多くなるのであろう。また、主人公の父・耕治がすべての表において2位であることから、耕治が百音に次いで重要な役どころを担うキャラクターであることが推察される。今後、田中（2011, 2016, 2021）などの先行研究に倣ってキャラクターと方言を結びつけるような考察をする際には、ここに示した基礎情報が有用になると考えられる。今回はそのような考察には立ち入らないが、のちの研究に関わることがらとして、ここに記しておく。

³ この定義は国立国語研究所編（2006）を参考にした。

3.2 音声・音韻項目

3.2.1 カ行・タ行音の有声化

気仙沼方言では、語中や語尾のカ行・タ行音が有声化し、ガ行・ダ行音になる。

カ行 → ガ行 : 開ける → アゲル、柿 → カギ

タ行 → ダ行 : 旗 → ハダ、的 → マド

『おかえりモネ』においてカ行音の有声化の再現としては(1)、タ行音の有声化の再現としては(2)のようなものがみられた。(下線部が当該の方言的特徴である。以下、同様。)

(1) コレ オワツタラ イグ。

これ 終わったら 行く。

[20 話、未知]

(2) ドーシテ トメニ キオ ウエデタノ？

どうして 登米に 木を 植えてたの？

[20 話、百音]

また、基本的に語頭のカ行・タ行音は有声化しない。語によって有声化するものもあるが、それらはごく数語(かかさん・女房・母・おかみさんなどを意味する「ガガサン」、棺箱を意味する「ガンバゴ」、蛭を意味する「ビル」など)に限られる。このように現実の気仙沼方言にはないにもかかわらず、『おかえりモネ』では(3)(4)のような例がみられた。

(3) アラ アンダ ソーユードゴー グイズグ ダイブダッタノ。

あら あんた そういうところ 食いつく タイプだったの。

[3 話、サヤカ]

(4) オー、 イッショニ ゴイ。

おお、 いっしょに 来い。

[19 話、耕治]

(3)(4)のような例は、現実の気仙沼方言からは逸脱しているものの、語中・語尾のカ行・タ行音の有声化の再現を試みようとしたものであると考えられる。

3.2.2 連母音アイ・アエの融合

気仙沼方言では、連母音のアイやアエが融合し、伝統的には「エアー」、より近代的には「エー」と発音される。

知らない → シラネー

アイの融合の再現としては(5)、アエの融合の再現としては(6)のようなものがみられた。

(5) ショーガネーナー。

しょうがないなー。

[15 話、亮]

- (6) ソリヤー、 オメー、 リョーシッテユーノワ ムカシワ ミンナ キニ
そりゃあ、 お前、 漁師というのは 昔は みんな 木に

クワシカッタダヨ。

詳しくあったんだよ。

[17 話、龍己]

3.2.3 イ段・ウ段音の統合

気仙沼方言ではイ段の音がウ段の音に近づき、シとス・チとツ・ジとズなどが互いに近い音になる中舌化現象が存在する。

獅子(しし)、煤(すす)、寿司(すし) → すべてスス

知事(ちじ)、地図(ちず)、辻(つじ) → すべてツズ

『おかえりモネ』でもその再現と思わしきものが出現するが、中舌母音の発音が忠実に再現されているわけではなく、「シ>ス」「チ>ツ」「ジ>ズ」と発音されていたため、ここではこの現象をイ段・ウ段音の統合として扱うこととする。『おかえりモネ』におけるこの方言的特徴の再現としては、(7) (8) (9) のようなものがみられた。

- (7) イヤイヤ タイスタモンダ。

いやいや 大したものだ。

[6 話、博史]

- (8) ツガウノー?

違うのー?

[3 話、みよ子]

- (9) トージワ アレダナ。 モネチャンノ ゴトガ アッタガラ セツズツナンダワナ。

耕治は あれだな。 モネちゃんの ことが あったから 切実なんだわな。

[12 話、秀水]

3.3 文法項目

3.3.1 格助詞サ

気仙沼方言では、共通語の「に」「へ」にあたる格助詞として「サ」が用いられることがある。

山に 登る → ヤマサ ノボル

西に 行く → ニシサ エグ

遊びに 行く → アソビサ エグ

- (10) (11) (12) が『おかえりモネ』における再現の例である。

- (10) コージ ケッキョグ、 トメサ イッダノカ。

耕治[は] 結局、 登米に 行ったのか。

[7 話、龍己]

- (11) オイシソーデショー、ココサ ヘーッテル キャベズト トマトデ、ケサ
美味しそうですね、ここに 入ってる キャベツと トマトは、今朝

ウズノ ハタゲデ トレダモンダガラネー。
うちの 畑で 取れたものだからねー。

[7話、みよ子]

- (12) コイズネー、ハルカラ イッシンマルサ ノッデンデスヨー。
こいつねー、春から 一進丸に 乗ってんですよー。

[19話、新次]

3.3.2 接続助詞ケントなど

気仙沼方言では、共通語の「けれど(も)」にあたる形式として「ケント(モ)」「ケンド(モ)」「ゲント(モ)」などがある。

まずいけれど、食えないわけでは ないからね。

→ マズイケンド、クエナエワゲデ ナイガラネ。

『おかえりモネ』では、(13)(14)のように再現されていた。

- (13) メダツ ホーデワ ネーケンド、マワリニワー スカレテイタ ヨーダシ。
目立つ 方では ないけれど、まわりには 好かれていた ようだし。

[5話、龍己]

- (14) アントキ フネ ダセダカラ アンタ ウジニ ウマンダゲンド、ダセネガッタラ
あの時 船 出せたから あんた うちに 生まれたけれど、出せなかったら

イマゴロ ココサ イナガッタカモヨー。
いまごろ ここに いなかったかもよ。

[12話、漁協副組合長]

3.3.3 接続詞ンデ

気仙沼方言では、共通語の「それでは」にあたる接続詞として「ンデ」がある。

それでは病院へ行ってみてもらいましょう。

→ ンデ ビョーインサ イッテ ミデモライッスぺ。

『おかえりモネ』でみられた再現の例としては (15)(16)のようなものがあげられる。

- (15) ンデ ナガウラサンモ イズレワ ヒメダ。
それでは 永浦さんも いずれは ヒメだ。

[3話、翔洋]

- (16) フフ、ゲンギデスヨ。 レンラグ ドーモ。 ンデ。
ふふ、元気ですよ。 連絡 どうも。 それでは。

[13話、新次]

3.3.4 助動詞ベ

気仙沼方言では、推量・意志・確認・勧誘の助動詞として「べ」が用いられる。「べ」は、前接する動詞によっては促音便が生じて「ぺ」となることもある。

- 推量：明日、雨だろう。 → アシタ アメダべ。
意志：明日は早く起きよう。 → アシタワ ハヤク オキッぺ。
確認：お祭り、お前も行くだろう？ → オマツリ、 オマエモ イクべ？
勧誘：みんなでがんばらう。 → ミンナデ ガンバッぺ。

『おかえりモネ』では、(17)(18)のように再現されていた。

- (17) ソレヨリ イシノモリショータロセンセーダべ。
それより 石ノ森章太郎先生だろう。 [1話、川久保]
- (18) エー ニギヤガデ マサヨサンモ ヨロコンデッぺナー。
ええ 賑やかで 雅代さんも 喜んでいるだろうなー。 [12話、秀水]

3.3.5 終助詞チャ

気仙沼方言では、共通語の「だろ」「じゃない(か)」「よね」などにあたる終助詞として終助詞「チャ」が用いられる。終助詞「チャ」は「相手が知っているはずだ・当然わかるはずだ」という事柄を示し、相手に確認させる機能がある。

歩けばいいじゃないか → アルケバイーッチャ

(19)(20)が『おかえりモネ』における再現の例である。

- (19) ソゴラヘンノ モノトワ レブルガ チガウッチャ。
そこら辺の ものとは レベルが 違うだろ。 [3話、川久保]
- (20) モネチャン。 ホンッダンドギ リョークンノ オトーサンガ フネ ダシテ
モネちゃん。 本当にあのとき 亮くんの お父さんが 船 出して
クレテ イガッタッチャ。
くれて よかったよね。 [12話、法事の客1]

3.3.6 終助詞サ

気仙沼方言では、共通語の「さ」「のさ」にあたる形式として終助詞「ッサ」「ノッサ」が使われる。共通語の「さ」「のさ」に比べてよく使用され、ニュアンス的にも違いがあるが、ここではひとまず「さ」「のさ」と共通語をあてることとする。ものごとを突き放して述べたり、説明的に語ったりするとき用いられる。

私は約束、今、あるのさ。 → オレ ヤクソグー、イマ、アンノッサー。

『おかえりモネ』では(21)のように再現されていた。

(21) ソノ、 ヤマノ ハツパサンタチガ、 ウミノ エーヨーニ ナンノサー。
その、 山の 葉っぱさんたちが、 海の 栄養に なるのさ。

[2話、龍己]

(21)は「ノッサ」ではなく「ノサ」となっているが、終助詞サを再現したものと考えられる。

3.3.7 終助詞ト

気仙沼方言では、共通語の「よ」にあたる形式として終助詞「ト」が用いられる。強く念を押すニュアンスで使われる。

これからも 頼みますよ → コレカラモ タノミスト。

(22)が『おかえりモネ』における例である。

(22) エー、 ****、 ホダデ、 アト アト アツイド。
えー、 ****、 ホタテ、 ** ** 熱いよ。

[20話、耕治]

(22)は「ト」ではなく「ド」となっているが、終助詞トの再現であると思われる。

3.3.8 敬意を表す形式ス・(ラ)イン

気仙沼方言には、敬意を表す形式として「ス」「(ラ)イン」がある。「ス」はおおよそ、共通語の「です」「ます」にあたり、「(ラ)イン」は相手に丁寧に働きかける言い方で、柔らかい印象を与える。

ここで分けますか → コゴデ ワゲルスカ。

お茶を飲んでください。 → オジャッコ ノマイン。

そこに置いて行ってください。 → ソゴサ オイテッテケライン。

『おかえりモネ』でみられた「ス」の再現の例が(23)である。「(ラ)イン」は「ライ」と聞こえたものを含めると、(24)(25)のようなものがあった。

(23) マーサ ミンナデ アタタカイモンデモ タベッペス。

まあさ みんなで あたたかいものでも 食べましょう。

[10話、みよ子]

(24) ソノマエ ソノマエニ アサオカサン コノ ゴマドーフー タベライン。

その前 その前に 朝岡さん この 胡麻豆腐 食べてください。

[3話、みよ子]

(25) オボンヤスミニ イチド、 ジッカニ カイライ。

お盆休みに 一度、 実家に 帰りなさい。

[11話、サヤカ]

3.4 語彙項目

最後に語彙について、『おかえりモネ』で再現されていた気仙沼方言の語彙には(26)(27)(28)のようなものがあった。

(26) ウソバツカリ カタツテ。 タダ ヤマヌシサンタット ノミスギタダケダベ。
うそばかり 言って。 ただ 山主さんたちと 飲み過ぎただけだろう。
[1 話、川久保]

(27) コノ オベントーバコ、 ホントー メンコイネー。
この お弁当箱、 本当[に] かわいいねー。
[17 話、亜哉子]

(28) オダツモッコ。
お調子者ー。
[17 話、耕治]

3.5 調査 A のまとめ

ここまで『おかえりモネ』に出現した方言的特徴の詳細を確認してきた。それぞれの方言的特徴をあらためて概観すると以下ようになる。

・音声・音韻項目：3 項目

カ行・タ行音の有声化／連母音アイ・アエの融合／イ段・ウ段音の統合

・文法項目：8 項目

格助詞サ／接続助詞ケントなど／接続詞ンデ／助動詞ベ
／終助詞チャ／終助詞サ／終助詞ド／敬意を表す形式ス・(ラ)イン

・語彙項目：3 項目

「カタル」／「メンコイ」／「オダツモッコ」

以上の音声・音韻 3 項目、文法 8 項目、語彙 3 項目が課題 A に対する答えであるといえよう。もちろん、今回対象としたのは 1 話から 20 話と限られた話数であったため、上記の 14 項目が『おかえりモネ』に出現する全ての方言的特徴とは言い切れない。しかし、今回の調査では主人公・百音の上京前に、百音や周囲のキャラクターたちが使用している方言的特徴を把握できたという点で有益といえる。(今後は主人公・百音の上京後、気仙沼に帰郷してから使用している方言的特徴との比較をしたい。)調査を継続していき、『おかえりモネ』に出現する方言的特徴の全容をつかむことを今後の目標とする。

4 調査 B の結果

『おかえりモネ』の方言に対する当地の母方言話者の印象・意識を調べた調査 B の結果を報告する。この調査は 2023 年 8 月 8 日・10 日に気仙沼市民公民館にて対面で行ったものである。調査に参加した 3 名の話者の性別・年齢・出身地を表 4 に示した。

表 4 調査に参加した話者について

話者	性別	年齢	出身地
A氏	女性	70代	気仙沼市
B氏	女性	70代	気仙沼市
C氏	男性	60代	気仙沼市

調査方法は「2.1.2 調査 B について」に記した通りである。話者の方々からは『おかえりモネ』に出現する方言について、非常に多くの観点から意見・指摘を受けた。それらの観点はどれも、未だ発展途上にあるドラマの方言に対する母方言話者の意識の研究に影響を与えるような示唆に富んだものであったが、紙幅の関係上、すべてを紹介することが難しい。そのためここでは、中でも特に注目すべきと考えられる意見・指摘に絞って結果をみていくこととする。以降では、「3 調査 A の結果」の結果の示し方に倣い、まず「4.1 音声・音韻項目について」「4.2 文法項目について」でそれぞれの項目に対する話者の意見・指摘をみたのち、「4.3 その他」でそれ以外のことがらに関する話者の意見・指摘をみる。

4.1 音声・音韻項目について

まずカ行・タ行音の有声化については、全体的に「言う」という回答が多く得られた。少数ながら「言わない」という主旨の指摘があったのは「私」が有声化した「ワダシ」についてである。

(29) ワダシモ トシトツテ キダ カラネ。

私も 年取って きた からね。

[3 話、サヤカ]

(29) について A 氏は「そんなに言わないかもしれない」としたのち、(29)の発言主のサヤカの出身地に注目し「もしかしたら登米方言の特徴かもしれない」と補足した。このことから、方言話者はドラマの方言が自身の使わないものであったとき、「自分とは異なる属性(ここでは出身地)を持った人であれば使うかもしれない」という想像をはたらかせるということがわかった。

連母音アイ・アエの融合についても、「言わない」という回答に付随する、自分と異なる属性を持った話者の方言使用のあり方を想像するような発言がみられた。

(30) ココサ ヘツテル キャベズト トマトデ、 ケサ ウズノ ハタゲデ
ここに 入ってる キャベツと トマトね、 今朝 うちの 畑で

トレダモン ダガラネー。

取れたもん だからねー。

[7 話、みよ子]

(30)に対してC氏は「言わない」と回答し、加えて「自分より年齢が上の女性なら言うかもしれない」と補足した。ここから、カ行・タ行音の有声化におけるA氏の指摘と同じく、C氏は「自分とは異なる属性(ここでは年齢・性別)を持った人であれば使うかもしれない」という想像をめぐらせていることがわかる。

さらに、これと同様の指摘は、イ段・ウ段音の統合についてもみられた。

(31) ギョグンタンツキ ナンツーモンガ ナカッタ ジダイワ キオンヤ
魚群探知機 なんていうものが なかった 時代は 気温や

カザムキナンカオ ミデ、 キョー サカナガ アツマルノワ コツチダーツテ、
風向きなんかを みて、 今日 魚が 集まるのは こっちだーって、

イッパツショーブノ カゲニ デダリ シタンダヨ。

一発勝負の 賭けに 出たり したんだよ。

[16 話、耕治]

(32) ハンバーグノ トーフワ ウズノ ダカラ、 テズクリダヨー。
ハンバーグの 豆腐は うちの だから、 手作りだよー。

[7 話、井上]

(33) コノ ナスワ ウズノダヨ。
この 茄子は うちのだよ。

[7 話、みよ子]

(31)はB氏から「言わない」、(32)(33)はC氏から「言わない」という回答が得られた例である。そして、その回答に付け加えるように、B氏からは「男性なら言うかもしれない」、Cからは「自分より年齢が上の女性なら言うかもしれない」という発言があった。ここでも「自分とは異なる属性(ここでは性別・年齢)を持った人であれば使うかもしれない」という想像が読み取れる⁴。

以上をまとめると、音声・音韻項目に関して、「言わない」という回答には「自分は言わないが、自分とは異なる属性(性別・年齢・出身地)を持つ他者であれば言うかもしれない」という補足的な発言が付随することが明らかになった。

⁴ C氏より年齢が上で女性のB氏が(32)(33)を「言う」、男性のC氏が(31)を「言う」と回答していたことから、B氏とC氏の想像は互いに的を射ていた。

4.2 文法項目について

続いて文法項目について、まず格助詞サについて、音声・音韻項目と同様、(34)に対して自分と異なる属性を持つ話者の方言使用のあり方を想像する発言がみられた。

- (34) ココサ ヘッテル キャベズト トマトデ、 ケサ ウズノ ハタゲデ
ここに 入ってる キャベツと トマトね、 今朝 うちの 畑で

トレダモン ダガラネー。
取れたもん だからねー。 [7話、みよ子]

C氏は(34)に関して「言わない」、そして「自分より年齢が上の女性なら言うかもしれない」と述べた。したがって、「言わない」という回答に自分と異なる属性を持つ他者を想像する発言が付随することは、文法項目にも共通することであるとわかる。

さて、ここまで『おかえりモネ』で再現されている方言的特徴に対する意見・指摘をみてきたが、他方、『おかえりモネ』で再現されていない方言的特徴に対する意見・指摘も得られた。

- (35) ンダヨ。 アド コーヒーガ スギダガラ オイシーコーヒード ワダシニ
そうだよ。 あと コーヒーが 好きだから 美味しいコーヒーと 私に

ニアウ リョーリガ ホシーナド オモッテ。
似合う 料理が 欲しいなと 思っテ。 [3話、サヤカ]

(35)の「コーヒーガ」の「ガ」についてA氏からは「気仙沼はニ・ガ・ヲなどをあまり用いない」、B氏からは「「コーヒーガ スキダカラ」ではなく「コーヒー スキダカラ」と言う」、C氏からは「「コーヒーガ」の「ガ」や「ワ」など助詞を省略して話すことが多いかもしれない」という指摘があった。実際に、現実の気仙沼方言では共通語の「が」のような主語を表す助詞や「を」のような目的語を表す助詞があまり用いられない。また、「に」にあたる助詞を使わない場合もみられる(東北大学方言研究センター2014)。このA氏、B氏、C氏の指摘からは、方言話者はドラマの方言をみるとき、再現されている方言的特徴ばかりではなく、再現されていない方言的特徴に関しても注意を向けているということが示唆される。

4.3 その他

4.3.1 方言を使うキャラクターについて

調査Bの中では、話者が方言を方言単体として試しているのではなく、方言とその方言を使うキャラクターと結び付けて試しているように受けとれる指摘があった。それは、主人公・百音の友人である明日美と悠人や、主人公・百音の父である耕治の方言に関するものである。

まず、明日美や悠人の方言について、(36)に対するA氏の言及があった。

- (36) チョット ママ、 ノミスギナイデヨー。
ちよっと ママ、 飲み過ぎないでよー。 [12話、明日美]

(36)の「ノミスギナイデヨー」についてA氏は「方言では「ノミスギスナヨ」と言いそうだが、それは若者の言い方ではない」と述べていた。この発言からはやはり自分とは異なる属性(ここでは年齢)をもつ話者への想像がはたらいしていることが読み取れる。また、ドラマで用いられている方言よりも気仙沼方言らしい形式があったとしても、A氏はその使用を強く希望することはなく、発話主の属性を加味したうえでドラマの方言を受容していると判断できる。同じ場面でB氏から得られた「普通なら若者でも地元に戻ってきたら方言が出てくる気がするが、若年層の人は標準語になっていても不思議ではない」という意見からも、A氏と同様の受容のあり方が読み取れる。

また、耕治の方言についてはA氏から「気仙沼出身ではない人の方言にしては近い」という指摘があった。「近い」とは「現実の気仙沼方言に近い」という意味だと解せる。また、調査に関連して『『おかえりモネ』をみていたか』という質問をした際、A氏は「ほぼ毎日見ていた」と答えていたことから、『おかえりモネ』の設定に詳しいことが推察される。このことを踏まえると、先の発言の「気仙沼出身ではない人」というところでさしている「人」とは、主人公・百音の父である耕治(気仙沼出身)ではなく、耕治を演じる俳優であると考えられる。

以上のことから、方言話者はドラマの方言をみる際に、方言単体ではなくキャラクターと結び付けてみていることが示唆された。また、方言の妥当性を判断するときは、方言を使うキャラクターの属性やキャラクターを演じる俳優の属性(ここでは出身地)を考慮することがあると推察できる。

4.3.2 相手や場面について

調査Bで用いる場面を選定するにあたり、筆者らの間で「(37)(38)ではカ行・タ行音の有声化が頻発しており、方言の再現が過剰なのではないか」という意見が出た。

- (37) タネガギー。 ソリヤー ムリダー。 ジバサイビョーナンガ、 サイサン
種ガキー。 それは 無理だー。 地場採苗なんか、 採算

アウ ドゴマデ モツテゲネーヨ。
合う ところまで 持っていけないよ。 [20話、漁協事務長]
- (38) ダメダメー、 イマワ、 モウゲナギヤ ナンネーndaヨ、 ダレモ。
だめだめー、 今は、 儲けなきや ならないんだよ、 誰も。
[20話、漁協事務長]

これについて話者に意見を求めたところ、B氏、C氏はともに「過剰ではない」と述べていた(A氏は未調査)。その理由についてB氏は「高校生に言って聞かせる場面としては適切であり、方言については過剰であるとは感じない」と説明しており、この説明の「高校生」という部分からは発話の相手、「言って聞かせる場面」という部分からは発話の場面に注目していることがわかる。したがって、方言話者はドラマの方言を発話の相手や場面とも結び付ける場合もある。

また、場面3・4⁵では相手との関係性について言及された。場面3・4を調査Bで用いる場面として選定した目的のひとつは、「方言を話すキャラクター(場面3ではサヤカ、場面4では翔洋)が東京から来た相手(場面3・4ともに朝岡)と会話する場面として、話者はどのような意見を抱くか」を調べることであった。これらの場面についてC氏からは、「サヤカと朝岡くらい仲が親密であれば、自然な方言の再現であるといえるのではないか」、「初対面ではある程度気を遣い標準語で話すが、相手と仲良くなってくると、だんだん方言を使用するようになるかもしれない」などの意見が得られた。この意見の「仲が親密であれば」「初対面では」という部分からは、相手との関係性に注目していることがうかがえる。したがって、方言話者はドラマの方言をみたり妥当性を判断したりするとき、方言を話すキャラクターと相手との関係性にも判断要素のひとつとなりえる。

4.4 調査Bのまとめ

調査Bからは大きく次の①、②のことが明らかになった。

- ① ドラマの方言について母方言話者が「(このような方言は)言わない」と判断する場合には、自分とは異なる属性(年齢・性別・出身地など)を持つ他者の方言使用のあり方を想像し、「(自分とは異なる属性を持つ)〇〇な人なら言うかもしれない」という補足的な意見を述べることが多い。

①をもとに、ドラマの方言の妥当性を母方言話者が判断する過程を図1に図示した。方言話者がドラマの方言の妥当性を判断するときは、図1のように、まずは「自分も言うか」を考え、「言わない」と判断した場合に、自分とは異なる属性を持つ他者の方言使用のあり方を想像し、補足的な発言をする。この想像と補足はドラマの方言をフォローする役割を担っているものと考えられる。調査の中で、B氏がとあるキャラクターの方言について「ぎこちない」と判断する前に、「一場面だけみてそう決めつけるのは悪い気もする」と前置きしていた。このことから、基本的に母方言話者の中には「ドラマの方言を悪く言うのは気が引ける」という気持ちがあることが推測できる。「言わない」という判断を下す場合には間接的にドラマの方言を否定することになってしまうため、想像や補足といったフォローと受け

⁵ 場面の具体的な内容については前述の「2023_ドラマの方言_場面紹介シート」を参照されたい。
(URL:https://drive.google.com/file/d/1y_1hVFq9gTbiSEtHQ1V7ZU8fQfH0bx2/view?usp=drive_link)

とれるようなことがなされるのではないかと考える。

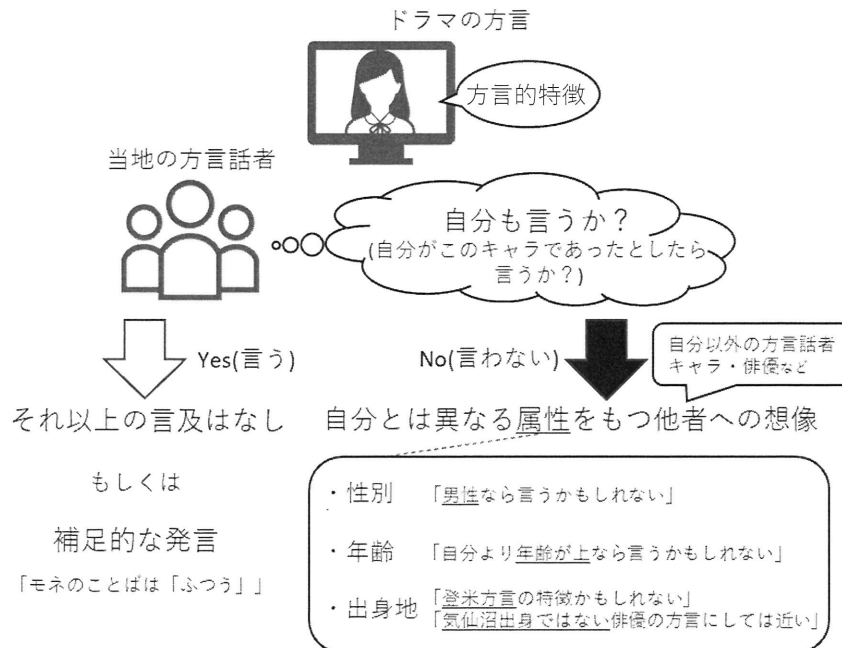


図1 ドラマの方言の妥当性を母方言話者が判断する過程

② 方言話者がドラマの方言の妥当性を判断するときは、方言的特徴が単体として捉えられるのではなく、方言的特徴を使っているキャラクターやそれを演じる俳優の属性相手、相手との関係性、場面など複数の要素とあわせて捉えられている。また、ドラマの方言の妥当性はそのような複合的な捉え方をもって判断される。

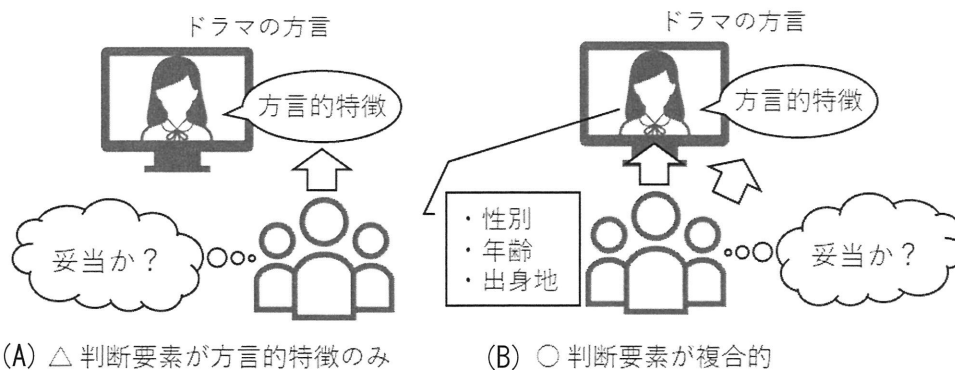


図2 ドラマの方言の妥当性を母方言話者が判断するときの判断要素

②を図示すると図2のようになる。図2(A)よりも、図2(B)の判断要素が複合的である方が、今回の調査Bで明らかになった気仙沼方言話者のドラマにおける方言の受容のあり方に近いと考えられる。

5 おわりに

ここまで『おかえりモネ』を対象に行った調査A、Bの結果・考察をまとめてきた。その

結果、課題 A については 14 種類の方言的特徴が出現すること、課題 B についてはドラマの方言の妥当性を母方言話者が判断するときの過程や判断要素を明らかにできた。しかし、これらは『おかえりモネ』の方言的特徴、そしてそれに対する母方言話者の意識の一部であるため、全容を明らかにするためには今後さらなる調査・分析が求められる。

今回取り上げた項目については考察を深化させ、紙幅の関係で触れられなかった調査 B の意見・指摘などについても検討していくことを今後の課題としたい。

文 献

尚学図書編(1989)『日本方言大辞典』小学館

国立国語研究所編(2006)『全国方言談話データベース 日本のおふるさとことば集成 第3巻 宮城・山形・福島』国書刊行会

田中ゆかり(2011)『「方言コスプレ」の時代—ニセ関西弁から龍馬語まで—』岩波書店

田中ゆかり(2016)『方言萌え!!—ヴァーチャル方言を読み解く』岩波ジュニア新書

田中ゆかり(2021)『読み解き!方言キャラ』研究社

東北大学方言研究センター編(2013)『伝える、励ます、学ぶ、被災地方言会話集—宮城県沿岸 15 市町—』東北大学大学院文学研究科国語学研究室

東北大学方言研究センター編(2014)『生活を伝える被災地方言会話集—宮城県気仙沼市・名取市の 100 場面会話—』東北大学大学院文学研究科国語学研究室

映像資料・引用

NHK 連続テレビ小説『おかえりモネ』. NHK, 2021 年 5 月 17 日-10 月 29 日放送. (テレビ番組).

謝 辞

今年度は 4 年ぶりに対面調査と行うことができ、また、同じく久方ぶりの開催となった「けせんぬま学講座」にも報告者として参加させていただいた。このような気仙沼当地の方々とお話しする機会をいただいて感じたのは、当地の方々の『おかえりモネ』への関心の高さである。調査にご協力くださったお三方は全員「毎日『おかえりモネ』をみていた」とおっしゃっており、「けせんぬま学講座」の会場でも「『おかえりモネ』をみていた」と反応をくださった方が多かった。NHK 連続テレビ小説への関心が高いことは先行研究で知っていたつもりであったが、それが今回身をもって実感することができたと同時に、NHK 連続テレビ小説の方言を研究する意義を改めて感じた。関係者の方々にお礼申し上げたい。

表1 『おかえりモネ』の基礎情報

(登場回数順)

順位	キャラクター名	登場回数	発話回数	発話文字数
1	永浦百音	20	645	9722
2	永浦耕治	15	265	5690
3	永浦未知	15	163	3281
4	永浦亜哉子	14	156	3143
5	永浦龍己	11	117	2417
6	佐々木翔洋	11	115	2773
7	新田サヤカ	9	142	3340
8	菊池里乃	9	24	282
9	及川亮	8	73	1081
10	後藤三生	7	91	1331
11	吉田みよ子	7	23	366
12	野村明日美	6	101	1687
13	早坂悠人	6	64	884
14	川久保博史	6	37	640
15	井上千代子	6	6	106
16	及川新次	5	27	559
17	小野文子	5	5	68
18	福本圭輔	4	33	289
19	森林組合の人3	4	3	44
20	谷口先生	3	13	162
21	川村先生	3	6	127
22	森林組合の人4	3	5	57
23	森林組合の人2	2	2	12
24	漁協事務長	2	7	129
25	漁協副組合長	2	3	113
26	永浦雅代	1	10	77
27	後藤秀水	1	11	205
28	野村道子	1	3	62
29	早坂香織	1	2	15
30	田中知久	1	15	258
31	消防の人(1話)	1	1	6
32	亀島の人	1	1	17
33	船のアナウンサー	1	3	59
34	天気予報アナウンサー	1	2	45
35	港の人	1	2	23

表2 『おかえりモネ』の基礎情報

(発話回数順)

順位	キャラクター名	発話回数	発話文字数	登場回数
1	永浦百音	645	9722	20
2	永浦耕治	265	5690	15
3	永浦未知	163	3281	15
4	永浦亜哉子	156	3143	14
5	新田サヤカ	142	3340	9
6	永浦龍己	117	2417	11
7	佐々木翔洋	115	2773	11
8	野村明日美	101	1687	6
9	後藤三生	91	1331	7
10	及川亮	73	1081	8
11	早坂悠人	64	884	6
12	川久保博史	37	640	6
13	福本圭輔	33	289	4
14	及川新次	27	559	5
15	菊池里乃	24	282	9
16	吉田みよ子	23	366	7
17	田中知久	15	258	1
18	谷口先生	13	162	3
19	圭佑の父	12	245	1
20	後藤秀水	11	205	1
21	永浦雅代	10	77	1
22	バスの乗客	10	203	1
23	漁協事務長	7	129	2
24	井上千代子	6	106	6
25	川村先生	6	127	3
26	小野文子	5	68	5
27	森林組合の人4	5	57	3
28	小学校の先生2	4	96	1
29	警察官A	4	31	1
30	警察官B	4	105	1
31	森林組合の人3	3	44	4
32	漁協副組合長	3	113	2
33	野村道子	3	62	1
34	船のアナウンサー	3	59	1
35	テレビのリポーター	3	38	1

表3 『おかえりモネ』の基礎情報

(発話文字数順)

順位	キャラクター名	発話文字数	発話回数	登場回数
1	永浦百音	9722	645	20
2	永浦耕治	5690	265	15
3	新田サヤカ	3340	142	9
4	永浦未知	3281	163	15
5	永浦亜哉子	3143	156	14
6	佐々木翔洋	2773	115	11
7	永浦龍己	2417	117	11
8	野村明日美	1687	101	6
9	後藤三生	1331	91	7
10	及川亮	1081	73	8
11	早坂悠人	884	64	6
12	川久保博史	640	37	6
13	及川新次	559	27	5
14	吉田みよ子	366	23	7
15	福本圭輔	289	33	4
16	菊池里乃	282	24	9
17	田中知久	258	15	1
18	圭佑の父	245	12	1
19	後藤秀水	205	11	1
20	バスの乗客	203	10	1
21	谷口先生	162	13	3
22	ラジオのアナウンサー	140	1	1
23	漁協事務長	129	7	2
24	川村先生	127	6	3
25	漁協副組合長	113	3	2
26	井上千代子	106	6	6
27	警察官B	105	4	1
28	小学校の先生2	96	4	1
29	永浦雅代	77	10	1
30	小野文子	68	5	5
31	町内会長	63	1	1
32	野村道子	62	3	1
33	船のアナウンサー	59	3	1
34	森林組合の人4	57	5	3
35	天気予報アナウンサー	45	2	1

36	テレビのリポーター	1	3	38
37	看護師	1	2	15
38	町内会長	1	1	63
39	歓迎会の出席者(6話)	1	2	33
40	一般の人	1	3	20
41	打ち上げの出席者(5話)	1	3	27
42	森林組合の人1	1	1	18
43	船のアナウンサー	1	1	14
44	住民1(7話)	1	1	4
45	子ども1	1	1	9
46	子ども2	1	1	6
47	子ども3	1	2	14
48	子ども4	1	1	8
49	テレビ局の人1	1	1	8
50	テレビ局の人2	1	2	31
51	テレビ局の人3	1	1	14
52	圭佑の父	1	12	245
53	消防の人1	1	3	20
54	消防の人2	1	3	20
55	小学校の先生2	1	4	96
56	工場の人	1	1	3
57	バスの運転手	1	1	19
58	バスの乗客	1	10	203
59	住民1(11話)	1	1	4
60	法事の客1(12話)	1	1	39
61	法事の客2(12話)	1	1	11
62	法事の客3(12話)	1	2	23
63	祭りの司会	1	2	32
64	ガソリンスタンドの人	1	2	28
65	村上	1	2	34
66	ラジオのアナウンサー	1	1	140
67	楽器屋の人	1	2	42
68	居酒屋の店員	1	1	3
69	警察官A	1	4	31
70	警察官B	1	4	105
合計				2259
集計				40490

36	一般の人	3	20	1
37	打ち上げの出席者(5話)	3	27	1
38	消防の人1	3	20	1
39	消防の人2	3	20	1
40	森林組合の人2	2	12	2
41	早坂香織	2	15	1
42	天気予報アナウンサー	2	45	1
43	港の人	2	23	1
44	看護師	2	15	1
45	歓迎会の出席者(3話)	2	33	1
46	子ども3	2	14	1
47	テレビ局の人2	2	31	1
48	法事の客3(12話)	2	23	1
49	祭りの司会	2	32	1
50	ガソリンスタンドの人	2	28	1
51	村上	2	34	1
52	楽器屋の人	2	42	1
53	消防の人(1話)	1	6	1
54	亀島の人	1	17	1
55	町内会長	1	63	1
56	森林組合の人1	1	18	1
57	船のアナウンサー	1	14	1
58	住民1(7話)	1	4	1
59	子ども1	1	9	1
60	子ども2	1	6	1
61	子ども4	1	8	1
62	テレビ局の人1	1	8	1
63	テレビ局の人3	1	14	1
64	工場の人	1	3	1
65	バスの運転手	1	19	1
66	住民1(11話)	1	4	1
67	法事の客1(12話)	1	39	1
68	法事の客2(12話)	1	11	1
69	ラジオのアナウンサー	1	140	1
70	居酒屋の店員	1	3	1
合計				2259
集計				40490

36	森林組合の人3	44	3	4
37	楽器屋の人	42	2	1
38	法事の客1(12話)	39	1	1
39	テレビのリポーター	38	3	1
40	村上	34	2	1
41	歓迎会の出席者(3話)	33	2	1
42	祭りの司会	32	2	1
43	警察官A	31	4	1
44	テレビ局の人2	31	2	1
45	ガソリンスタンドの人	28	2	1
46	打ち上げの出席者(5話)	27	3	1
47	港の人	23	2	1
48	法事の客3(12話)	23	2	1
49	一般の人	20	3	1
50	消防の人1	20	3	1
51	消防の人2	20	3	1
52	バスの運転手	19	1	1
53	森林組合の人1	18	1	1
54	亀島の人	17	1	1
55	早坂香織	15	2	1
56	看護師	15	2	1
57	子ども3	14	2	1
58	船のアナウンサー	14	1	1
59	テレビ局の人3	14	1	1
60	森林組合の人2	12	2	2
61	法事の客2(12話)	11	1	1
62	子ども1	9	1	1
63	子ども4	8	1	1
64	テレビ局の人1	8	1	1
65	消防の人(1話)	6	1	1
66	子ども2	6	1	1
67	住民1(7話)	4	1	1
68	住民1(11話)	4	1	1
69	工場の人	3	1	1
70	居酒屋の店員	3	1	1
集計				2259
集計				40490

医療・介護における方言

山田はるか・井戸遥菜・山野咲

1 調査の概要

本調査は、気仙沼市の医療・介護における方言の問題について調査することを目的とした。調査は2023年8月8日から10日にかけて、宮城県気仙沼市で行った。調査の目的は以下のように設定した。

- ① 医療・介護場面における気仙沼方言話者の方言使用と不理解の実態
- ② 医療・介護場面における気仙沼方言話者の方言使用の意識
- ③ 医療・介護場面における気仙沼方言の使用が利用者に与える印象

調査対象者は、気仙沼市出身の以下の3名であり、性別・年齢は以下のとおりである。(話者の名字の頭文字をとってYさん、Hさん、Oさんとする。) 調査は、それぞれの話者に1時間30分ずつ行った。

Yさん 77歳 男性
Hさん 73歳 男性
Oさん 67歳 女性

2 医療・介護場面における気仙沼方言話者の方言使用と不理解の実態

2.1 先行研究

近年、方言の世代差・地域差によるコミュニケーション・ギャップの問題が発生するようになった。医療・介護現場における問題については日高(2007)や永田・鈴木・大城(2009)、今村・岩城(2020)など、様々な研究で繰り返し指摘されてきたが、これらの研究では方言が通じない問題についてはケアする側にしか調査されておらず、実際にどのように困ったのか話し手である利用者の側に調査した研究は管見の限りでは見当たらなかった。そこで、本調査では話し手の側に、方言が医師・看護師・介護士等に伝わらず困った経験について調査した。なお、調査地である宮城県気仙沼市では、実際に2011年の東日本大震災で被災した側と支援する側との間に方言によるコミュニケーション・ギャップが生じており、東北大学方言研究センターでは、聞き取り調査をもとに『支援者のための気仙沼方言入門』を作成した(小林 2018)。その結果、中舌化・有声化・口蓋化などの発音面、語彙面、文法面で支援者が理解に難しさを感じていたことが明らかになっている。

2.2 調査の概要

2.2.1 調査の目的

本節の調査は、以下の2点の目的で行った。

- (1) 気仙沼方言話者の医療・介護の具体的な場面における方言の使用の実態をみる。
 - (2) 気仙沼方言話者が医療・介護や日常生活で感じた方言によるコミュニケーション・ギャップ(不理解経験)の有無について調査する。
- (1)については、方言の不理解が起こる前提として、具体的な場面で話者が方言を使用しているかどうかロールプレイにより実態を見た。(2)については、話者が感じた方言不理解の経験についてできるだけ具体的に自由回答をしてもらった。

2.2.2 質問項目、手順

以下のような設定・場面でロールプレイを行った。

<医療場面>東京に旅行中、急に具合が悪くなり東京の病院で医師に症状を説明する場面

- ・症状：頭痛/腹痛/熱がある/咳が出る

<介護場面>デイサービスを受けていて、初めて会う介護士と接している場面

- ・朝、介護士が自宅まで迎えに来てくれた
- ・昼食を食べているとき、食事が多くて全部は食べられないと思った
- ・入浴の手伝いをしてもらっていて、お湯が熱すぎると感じた
- ・レクリエーションに参加中、疲れたから休みたいと思った
- ・デイサービス終了後、車で自宅まで送迎してもらった

不理解経験については、医療・介護・日常場面で、話者本人の経験や他の人から聞いた経験で、方言が相手に通じずに困った経験について尋ねた。

2.3 調査の結果、考察

2.3.1 ロールプレイの結果

2.3.1.1 ロールプレイでみられた発話行為

ロールプレイの結果について、方言か共通語かに関わらず、どのような発話が行われているかを観察すると、以下のような発話が見られた。気仙沼方言の表現のうち、このような発話に関わる表現は医療・介護場面で聞かれる可能性があると考えられる。

- ・意思表示：痛み・感覚・感情などを表明する 例) アツイゾー。
- ・情報提供：いつから、なぜ、どのようになどを説明する
例) ヒダリガワガ チョットコー ドンツウツテ イウノカナー イタミガ ハッセイ スルン
デスヨー。
- ・確認要求：自分の症状等について相手に確認する
例) イツモ ソーユー フーニ カゼヒイタリスルト ノドニ クルンデ、アノー タブン カ

ゼカナート オモウンデスケド

- ・ 依頼：相手に何かを依頼する

例) オラ ツカレダガラ ヤスミテガラ ソッチサ ツレテッテケライン。

- ・ 許可要求：自分の行動について許可を求める 例) スコシ ヤスンデモ イーベカネ。

- ・ 非難：相手を非難する 例) アツイッチャー ナシテ コンナニ アツクスンノー。

- ・ 恐縮：依頼する前に恐縮する

例) モーシワケネケッド モスコシ アツイノデ ミズタシテ モラエネベカ。

- ・ 挨拶：挨拶する 例) マダ アシタ オネガイネー。

- ・ 感謝：相手に感謝する 例) キョーハ ドーモ アリガトー。

2.3.1.2 ロールプレイで出現した方言特徴

表1 医療場面のロールプレイの結果

	Yさん	Hさん	Oさん
頭痛	アダマイデー。ズキンズキンテ イタムノ。(外側の痛み:「ステコビ イデー」(額が痛い)「ステコビ ブツケタ」(額をぶつけた)	ナンダカ アタマ イダグデ ワカンネッタケドモ。 キノー ケサオキタラ キューニ アダマ イダグデ ワガンナイ ダゲッド (東京であることを意識すると) ケサガダカラ チョット アタマが イタクテ、デー タイヘンナノデ センセイニ ミテモライタイト オモッテ キマシタ。	ナンダカ アタマが イタインデスヨー。ズキズキッテイウカ、ガンガンッテイウカネー。 ナンカ ソンナ カンジデ、オクノ ホウマデ ガンガンッテ シマスネ。
腹痛	ハラ <u>イデー</u> 。ゲリスンダヤ。ゲリガトマラ <u>ネー</u> ンダヤ。	ナンカ オナカガー ソノ イタクナッテ ソレデー アノソウデスネ グアイガワルイノデ ドウシタモノカト オモッテ センセイニ ミテモライタイト オモッテ キマシタ。 ナンカ キリキリトイウ アノ コーカナリツヨクオシツブサレル カンジノ イタミデー イママデニナイ イタミデ チョットアノ ショージョーガオモワシクナイノデ センセイニ ミテモライタイト オモッテ キマシタ。	ナンダカ オナカガ ドーモ イタクテ。ユーベ タベスギタノカナ。ナンカコッチノ ヒダリノ ヨコハラノ ハイノココノココノダ。ヒダリガワガ チョットコードンツウッテ イウノカナー イタミガハッセイスルデスヨー。
熱がある	ネツアル。ネツ サガンネーンダヤー。コエクテ ナンニモ デキネーヤー。	アノー ネットガデデー デーアノ カラダノ チョーシモ ワルイノデ スゴイアノー カゼデモヒイタノカ イマ ハヤリノ シンガタコロナニナッタノカ ネットモ サンジューハチド クライナッテルノデ シンバイニナッテ アノー ビョウインニ キマシタ。 ノドモ ハレテ ノドモ イタイノデ ネットモ アルシー カゼカナト オモウンデスケド。	イヤー ナンカ カゼヒイタンデショーカネー。ユーベカラ ネットガ アッテ ナカナカ サガラナインデスヨー。 ソノタメ ネムレナイシー。ナンカ フラフラスルシー。
咳が出る	セキデテ トマンネー。ノドノ ホウイデー。/ノドノ オグ イター。/ノドノ オグ ハレデル。	アノー セキガ トマラナクテ ノドガ イタイシー。ニサンニチマエカラ ソーユー ショージョーガ イツモ、イツモ ソーユー フーニ カゼヒイタリスルト ノドニ クルンデ、アノー タブン カゼカナート オモウンデスケド。センセイガラ ミテモライタイト オモッテ キョーワ キマシタ。 ノドガ イタイッテイウノ ネットワ ソレホドナインデスケドモ セキガ ナカナカ トマラナイノデ セキドメガ アッたら オネガイシタイナート オモッテ キマシタ。	セキガ デテ トマラナク ナツタリ スルデスヨネ。ノドガ ナンカネ コセラセラニ ナツタリ コー オソツテクルンデスヨネー。デモー セキハジマッタラモーホントニ ヒドイデスネー クルシクナリマス。ソノクライ セキ デマスヨー。

表2 介護場面のロールプレイの結果

	Yさん	Hさん	Oさん
朝、介護士さんが自宅まで送迎に来てくれた時	アリガトウネ。	イツモ オセワニナツテ オリマス。マタ キョーモ ヨロシク オネガイシマス。 ドモドモ イツモ アリガトウゴザイマス。キョーモ ヨロシク オネガイシマス。	家の人たちは「オハヨウゴザイマス」と挨拶するけど、連れていかれる人たちは言わないかも。家のおじいさんは言わない。手を振るなど、身振り手振りをする。お年寄りの挨拶はあまり聞かない。雰囲気や身振りで分かる。
デイサービスの昼食が多くて食べきれない時	ハライッペーダヤ。キョー クイタクネーヤ。	イヤイヤ ゴツツォー オオクテ ゼンプ タベラレネーヨ。モーシワケネケッドモ スコシ ノコシタンダケッドモ インダベカー。	施設で食事してるとき、残すとか残さないとか自分からは言わない。介護士が「ナニソイツ タベネーノスカーと聞く方が多い。 (介護士に聞かれたら) コイツワ アマリイマホラ オナカイッパイダカラ。コイツワ イラナイカラ。コイツワ イマ アマリ タベタクナイ。/ウマグナガラ、ウマグネ/ハライッペーダカラ。
デイサービスの入浴でお湯が熱すぎた時	アツイゾー。 (冷たいときには) ヒヤッケゾー。	モーシワケネケッド モスコシ アツイノデ ミズタンテ モラエネベカ。	アツイッチャー、アッチーガラー、ナシテソソナニ アツクスノー。/シャワーアツイデバー スコシ サゲテケライン、ヌルクシテケライン。/アツクテ ワガンネガラ サゲテネー。
レクリエーションで「少し疲れたから休みたい」と言う時	コエー、コエー。	スコシ ツガレタヤー。スコシ ヤスンデモ イーベカ。	オラ ツカレダガラ ヤスミテガラ ソッチサ ツレテッテケライン。
デイサービスが終わり家に送迎してもらった時	キョーワ ドーモ アリガトー。	ドモドモ オカゲサマデ キョーモ タノシク アソバセテモラッタダヤー。ドモドモ アリガトーゴザイマシタ。	アリガトネー (介護士がマダアシタネーと言うと) ハイハイ 何も言わず黙っている人ばかり見てきた。

ロールプレイの結果から、医療・介護・日常場面において、音韻変化、語彙、文法などに気仙沼方言の特徴が表れていることが分かった。このうち、『支援者のための気仙沼方言入門』に収録されていたのは、音韻変化についての説明、助詞「サ」、助動詞「べ」、「コワイ・コエー」(疲れた)、「ワガンネ」(駄目だ)、「セラセラスル」(のどがいらいらする様子)だった。

2.3.2 不理解経験について

「通じなくて困った」という経験は、Hさんが聞いた震災時に支援者が身体部位の名称等が理解できなかったという経験以外、あまり多くは無かった。「困ったというほどでもないが通じなかったことがある」経験は、他地域出身の家族に対して「ナゲル」「コエー」のような同形の共通語が存在する方言を用いて誤解が生まれたという経験や、4・50年前に修学旅行先で方言が通じなかったという経験、方言だと知らないままパソコンで変換しようとしてできなかった経験がある。これらの共通点は、話者が方言だと気づいていなかったという点である。そのほか、介護施設に入居中の方が、家族に方言を使用しており身体部位の名称などが出現していたものの、夫婦なので理解に問題はないという意見があった。この方の場合、相手が家族でなく施設の方だった場合も同様に方言を話すのかという点が重要なのではないかと考えられる。

表 3 不理解経験の質問に対する結果

	医療	介護	日常
Yさん	経験的にはない。救急車に乗ったこともあるが、あまり困ったことはない。救急車で看護師さんが患者さんから聞き取りを行ったりもするが、通じるので、診断を誤ったり支障が出たりすることはない。	週に一度、介護施設に入っている奥さんに着替えを届けに行く旦那さんから聞いた話で、奥さんが「ステコビ イデガラ コーヤク ツケテケロ」「ケンピ(足) ハルカラ サスツテケロ」のように言うことがあると聞いた。旦那さんには通じている。	なし
Hさん	震災の時、避難所である総合体育館の館長をしていた。その時に、DMATで東京の大学病院から先生や看護師さんが来たときに、具合が悪い人の体の部位などが伝わらなかったと聞いた。 アグド(かかと)、デビ(額)、オドンギヤ(額)、ホッダブ(ほっぺた)、マナブ(目)	特になし	・気仙沼市の70代の方の話で、ホイジョ(包丁)とパソコンで打とうとしても変換されずに戸惑ったと聞いたことがある。 ・Hさんの2・3歳上の先輩の話で、40・50年前に、修学旅行先で「テンデンコ(別々に)に包んでください」と言ったが伝わらなかったということがある。
Oさん	今はない。	気仙沼の介護施設なら気仙沼の職員が多いので、伝わらないことはない。	・「コエーコエー」(疲れた)と言ったときに、群馬県の娘の夫との会話で「コワイって何が怖いの?」と言われたことがあった。 ・群馬の方(当時30歳前)と話している時、「ゴミナゲテ」と言ったら「投げていいの?」と言われた

2.4 医療・介護場面における気仙沼方言話者の方言使用と不理解の実態のまとめ、今後の課題

ロールプレイにおいて、有声化などの音韻変化や文末表現、身体語彙や「コエー」(疲れた)「ワガンネ」(駄目だ)「ヒャッカー」(冷たい)などの語彙がみられた。また、不理解経験においても身体語彙、同形の共通語が存在する方言語彙などでコミュニケーション・ギャップがみられたことが分かった。これらの方言特徴は、小林(2018)における調査と共通している部分が多く、医療・介護場面でよく聞かれる語であると考えられる。これにより、『支援者のための気仙沼方言入門』が平時の医療・介護場面においても有効であるという可能性が示された。

不理解経験については、通じない経験自体はあっても、「方言が相手に通じなくて困った」という意見は、話者からはほぼ聞かれなかった。話者が「笑い話」として話していた経験もあり、トラブルや人間関係の悪化等の深刻な問題はあまりなかったと思われる。このように、方言の話し手の側からは、それほど深刻にはとらえていない可能性があり、不理解の問題は主に聞き手側が感じる問題であると考えられる。今後の課題として、今回はロールプレイの場面が限定されていたため、より多くの場面について調査を行いたい。

3 医療・介護場面における気仙沼方言話者の方言使用の意識について

3.1 先行研究

医療場面において患者が用いる言葉については、日高(2007)で「病院での診察の場面において、忠実に述べようとすればするほど、日頃使い慣れた表現である方言に傾きやすい」という指摘がされている。この調査では、患者は公的な場である病院では「共通語」を使用しようとするが、共通語ではうまく表現できないという判断により「方言」が出てしまうということが述べられている。また、永田・鈴木・大城(2009)では介護現場でのケアをする側の言語選択について調査を行っており、約5割で「方言で話すことは望ましい」、約3割で「必ずしも方言を使用しなくても良い」という結果が得られている。

このように医療・介護の現場において、患者がどのような言葉を選択するのかということや、介護士などケアする側がどのような言葉を望ましいと考えているのかについては着目がされてきた。しかしながら、ケアされる側がどのような言葉を使っている意識があるのかという調査は行われていない。医療・介護場面においてケアされる側がどのような言葉を使っている意識があるか・その理由は何かということ进行调查することは、医療・介護場面での望ましいコミュニケーションを検討することに意義があると考えられる。

3.2 調査の概要

3.2.1 調査の目的

本調査は、医療・介護・生活場面における、話者の方言使用の有無の意識と、話者が方言を使用するか否かを選択する要因について調査することを目的としている。医療・介護・生活場面において普段話者がどのような言葉を用いているかを質問し、その理由についても聞き取りを行うことで場面による方言使用の意識を調査する。

3.2.2 質問内容、手順

病院・介護・生活全般の場面において、異なる親疎関係や属性の相手に対し、方言を使用するかどうかという話者の意識調査を行った。調査では、木部(1999)を参考に選択肢を用意し、PC上に表示して話者に選択してもらった形式をとった。選択後にその理由についても尋ねた。選択肢は以下の通りである。

1. 共通語で話すようにつとめる
2. 方言独特のことばが出ないようにする
3. 家にいるときよりは多少丁寧な方言で話す
4. 家にいるときと同じ方言で話す

また、質問項目の場面については以下のようなものを用いた。

〈医療場面〉

- ・ 気仙沼の定期的に通っている病院
 いつも診察して貰っている医師／顔見知りの看護師
- ・ 気仙沼の初めて行く病院
 初めて診察してもらう医師／初めて会う看護師
- ・ 東京の病院
 医師／看護師

〈介護場面〉

- ・ 介護施設でデイサービスを受ける
 よく合う顔なじみの介護士／初めて会う新しく入ってきた介護士
- ・ 家族に着替えの手伝いをしてもらう
 同居している家族／めったに合わない息子さんのお嫁さん

〈生活場面全般〉

- ・ 近所に住んでいる、気仙沼の地元出身の人
- ・ 東京から来た観光客の人
- ・ 同居しているお孫さん
- ・ 遠くに住むお孫さん

*介護場面の「同居している家族に着替えの手伝いをしてもらうとき」と生活全般場面の「遠くに住むお孫さんと話すとき」についてはシチュエーションを考慮し次のように選択肢を変えている。

- | |
|---|
| <ol style="list-style-type: none">1. 共通語で話す2. 方言独特のことばが出ないように話す3. 普段よりも少し丁寧な方言で話す4. 普段通りの方言で話す |
|---|

*生活場面全般の「同居しているお孫さんと話すとき」についても次のように選択肢を変えている。

- | |
|---|
| <ol style="list-style-type: none">1. 共通語で話すようにつとめる2. 方言独特のことばが出ないようにする3. 他の家族に対するよりは多少丁寧な方言で話す4. 他の家族に対するのと同じ方言で話す |
|---|

3.3 調査結果、考察

調査結果は表4～6の通りである。

表4 医療場面における方言の使用意識

場面	気仙沼の定期的に通っている病院		気仙沼の初めて行く病院		東京の病院		
相手	いつも診察してもらっている医師	顔見知りの看護師	初めて診察して貰う医師	初めて会う看護師	医師	看護師	
Yさん	回答	共通語	方言	方言	方言	方言	丁寧な方言
	理由	通じるから	気仙沼の人が多く方言に慣れている	通じるから	通じるから	通じるから	通じなければ丁寧な話したい
Hさん	回答	丁寧な方言	方言	共通語	共通語	共通語	共通語
	理由	敬意を持ちたいから。地元の先生には通じる	通じるし、いつも通りの言葉のほうがスムーズ。丁寧な言葉ではかえってよそよそしい。	言葉が理解されないと困るから	気が付かないで方言が出てきたら恥ずかしい	方言が出てしまったら恥ずかしいから	方言が出たら恥ずかしいから気にする
Oさん	回答	共通語	無選択	共通語	無回答	共通語	無選択
	理由	特に意識していない	相手に合わせている	意識していないが方言ではない	方言ではないと思う、緊張して丁寧語になる	伝わらないことはめったにない	わからなければ言い直す

表5 介護場面における方言の使用意識

相手	顔なじみの介護士	初めて会う介護士	同居している家族	同居していない家族	
Yさん	回答	方言	方言	方言	無回答
	理由	通じるから	通じるから	通じるから	
Hさん	回答	丁寧な方言	方言独特の言葉が出ないように	方言	方言独特の言葉が出ないように
	理由	お世話になるので失礼にならないように話したい	方言が強すぎると理解されないかもしれないから	家族だから普段通りの言葉で気にする必要はない	方言独特の言葉だと意味がわからず気を使わせるかもしれない
Oさん	回答	無回答	共通語	方言	共通語
	理由	方言を使うことでより身近になれると思う	初めての方で家族と話すときだと共通語を話す	普段通りの方言のほうが話が通じやすい	めったに会わないから気を遣う

表6 生活場面全般における方言の使用意識

相手	近所の気仙沼出身の人	東京から来た観光客	同居しているお孫さん	遠くに住むお孫さん	
Yさん	回答	共通語	丁寧な方言	方言	方言
	理由	わかる人にわかるように話したい（若い人はあまり方言を使わない）	言葉が通じなそうんらわかる言葉で話す	通じるから、小さいころから知っているから	小さいころから接しているから
Hさん	回答	方言	共通語	方言	方言独特の言葉が出ないようにする
	理由	相手も方言で話しているから	方言がわからないと相手が困るから	家族だから気にしないが、あまり方言を使うと孫の親から注意される	方言で話してもわからないことが多いから

*Oさんについては調査未実施

3.4 考察

3.4.1 医療場面・介護場面での不理解について

気仙沼での医療・介護場面における方言使用においては「方言が通じるから方言を用いる」という回答が多く見られ、話者に「方言が通じない」という意識はあまり見られなかった。また、看護師や介護士は地元出身の方が多く、問題なく言葉が通じるという回答も見られた。しかしながら今村・岩城(2020)では、介護場面においてケアをする側には高い程度で方言不理解の経験があるという指摘がなされている。2節「医療・介護場面における気仙沼方言話者の方言使用と不理解の実態」でも指摘した通り、医療・介護場面における不理解の認識は聞き手側に多く見られる可能性がある。

3.4.2 親疎関係・属性による言葉の使い分けについて

今回調査を行った3人の話者に関しては、場所や属性・親疎関係による言葉の使い分けに関してかなり意識の違いがあることがわかった。Yさんについては相手の属性によって使い分けをする意識があまり見られず、かなり多くの場面で方言を用いる結果となった。対してHさんとOさんでは場面や属性によって言葉を使い分ける意識が見られた。Oさんについては普段の発話が方言か共通語かはあまり意識しておらず、判断が難しいという意識が見られた。また、医療・介護場面で方言を多く用いる話者は生活全般場面でも方言使用の回答が多く見られた。

使い分けの意識の見られたHさんとOさんの項目に着目すると、「初めて会う医師・看護師・介護士」や「同居していない家族」といった親疎関係的に遠い属性の相手には「共通語を話す」「方言独特の言葉が出ないようにする」という意識が見られた。相手との関係が比較的遠かったり、相手の出身地がわからなかったりするときは方言使用を避ける可能性がある。

3.4.3 気仙沼方言話者における方言／共通語の使い分けの要因について

話者がある場面において方言を選択するか、それとも共通語を選択するかということについては、その選択の背景に共通した理由が見られると考えられる。今回の調査で話者の回答から得られた言葉の使い分けの理由としては表7の5つがある。

表 7 方言/共通語の選択の要因

方言／共通語の選択の要因	
方言が通じるかどうか	医療・介護現場では「方言が通じない」という意識はほとんど見られず、「通じるから使う」という回答が多かった。「通じない言葉を使うと相手に気を遣わせる」という相手への気遣いの意識も見られた。
相手への敬意の表明	病院の先生や介護士など「お世話になる人」に対しての敬意の表明のために「丁寧な方言」を選択する回答が多く見られた。
相手との親しさ	話者にとって親しく、気を遣わない相手（家族、顔見知りの看護師）などには方言を使ったほうがコミュニケーションがスムーズだという意識が見られた。一方で関係が浅く、気を遣う相手に対しては共通語が好まれた。
方言使用への恥ずかしさ	気仙沼方言を話さない可能性の高い相手に対して、方言を話すのが恥ずかしいと感じる意識が見られた。
相手が使う言葉に合わせる	相手の使う言葉に合わせるという回答が見られた。

「相手への親しさ」の項目では、親しい相手であれば普段通りの方言を用いた会話の方が意思疎通がスムーズであるという意識が見られ、日常的なケアの場面で方言を使うことの利点が窺える。また、日常的な診察場面や介護場面においては、相手と比較的親しい関係であるために、話者が意識的に方言を用いている可能性も考えられる。日高(2007)では、患者は医療場面で共通語を話そうとしているが、伝える意識が先行した結果意図せず方言を使ってしまうということが述べられている。しかしながら今回の結果から、患者に必ずしも「共通語で話すべきである」という意識があるわけではないということが考えられる。

3.5 医療・介護場面における気仙沼方言話者の方言使用の意識のまとめ、今後の課題

本調査では気仙沼市における医療・介護・生活場面での方言使用の有無と、その場面において方言／共通語を選択する理由について調査を行った。調査結果から、気仙沼方言話者では医療・介護場面で方言が通じないという意識はあまり見られないことがわかった。また個人差はあるものの、親疎関係的に遠い相手に対しては方言使用を避ける傾向があることがわかった。共通語／方言の使い分けを行う要因としては「方言が通じるかどうか」「相手への敬意の表明」「相手との親しさ」「方言使用への恥ずかしさ」「相手が使う言葉に合わせる」という5つの要素を見ることができた。中でも「相手との親しさ」では、日常的なケアの場面では方言を使用した方が会話がスムーズだという医療・介護場面における方言使用の利点も確認できる。

今後の課題は、相手の属性によってどのように言葉を使い分けるかということのより詳細な調査だ。今回の調査は少人数への調査だったため、医師・看護師・介護士という立場による方言／共通語の使い分けについては詳しく見るができなかった。より大人数での調査を行うことで傾向を明らかにしていきたい。また、調査表についても更なる検討が必要である。今回の調査方法では、話者自身が普段話している言葉が方言か共通語かを意識していない場合、回答が難しくなってしまう。より明確な回答が得られ、方言使用の実態を正しく理解できる調査方法を検討していきたい。

4 医療・介護場面における気仙沼方言の使用が利用者に与える印象について

4.1 先行研究

看護・介護場面での方言使用については、永田・鈴木・大城(2009)が、高齢者を対象に方言を使用することは、看護・介護職者とのコミュニケーションの促進させる一方、中途半端な方言の使用では適切な対応が困難となり、方言を使用するうえでの葛藤が看護・介護職者にあるとしている。さらに、日高(2007)は、保健・医療・看護・介護・福祉の分野における従事者の方言使用を評価しながらも慎重な対応が必要だと述べる。今村・岩城(2020)では、介護士が利用者に方言で話しているのを見て、利用者の家族が悪い印象を抱く場合があることを指摘している。

これらの議論を受け、医療・介護の場面での方言使用はどのような印象を利用者に与えるか、利用者側はどのようなことばで話してもらうことが望ましいと考えているかを明らかにすることは、医療・介護場面での円滑なコミュニケーションを助けるため重要であると考えられる。

4.2 調査の概要

4.2.1 調査の目的

本調査は、医療・介護場面における、相手（医療・介護従事者・家族）の方言使用が聞き手（サポートを受ける者）に与える印象について調べることを目的としている。利用者は医療・介護従事者にどのような言葉で話してほしいかについて、気仙沼方言話者に理由も含め聞き取り調査を行う。

4.2.2 質問内容、手順

医療・介護の様々な場面を設定し、それぞれの場面で接する人にどのようなことばで話してほしいかを質問した。回答は選択式とし、木部(1999)の意識調査を参考に、以下の選択肢を作成した。

- | |
|---|
| <ol style="list-style-type: none">1. 共通語で話してほしい2. 方言独特のことばが出ないように話してほしい3. 多少丁寧な方言で話してほしい4. 方言で話してほしい |
|---|

場面と相手は以下の通りである。

〈医療場面〉

- ・気仙沼市の定期的に通っている病院：いつも診察してもらっている医師／顔見知りの看護師
- ・気仙沼市の初めて行く病院：初めて診察してもらう医師／初めて会う看護師

〈介護場面〉

- ・介護施設でデイサービスを受ける：顔なじみの介護士／初めて会う介護士
- ・着替えの手伝いをしてもらう：同居している家族（※）／めったに会わない息子の嫁

※ 介護場面の「家で、同居しているご家族に着替えの手伝いをしてもらうとき」については、シチュエーションを考慮して以下のように選択肢を変える。

1. 共通語で話してほしい
2. 方言独特のことばが出ないように話してほしい
3. 普段より多少丁寧な方言で話してほしい
4. 普段通りの方言で話してほしい

4.3 調査結果、考察

調査結果は、以下の表8・9のようになった。表は、得られた回答について、その選択肢を選んだ理由や要望・補足に当たる部分に分けて作成した。調査結果をもとに、医療・介護場面において使われる方言が利用者に与える印象と、医療・介護場面で望まれることばについて考察する。

表8 医療場面における方言の印象

場面		気仙沼市の定期的に通っている病院		気仙沼市の初めて行く病院	
相手		いつも診察してもらっている医師	顔見知りの看護師	初めて診察してもらう医師	初めて会う看護師
Yさん	回答	無回答	共通語	未調査	未調査
	理由	・相手の先生は若い人が多いので、方言で話す人はいない。			
	要望など		・医学用語で話されるのが一番ひどい。 ・医療用語をカタカナで語られて通じないことがある。		
Hさん	回答	方言	方言	共通語	方言
	理由	・地域に入ったら方言を使ったほうがコミュニケーションを取りやすい。 ・親しみを感ずる。 ・本音を言えるように感じる。	・方言のほうがコミュニケーションを取りやすく親しみがわく。 ・共通語は疎遠な感じがする。		
	要望など		(補足) その地域にとっては方言が共通語のようなもの。	・先生方は地元の方でない人も多く、あまり要求するのも失礼なので無理してもらわない。	・よそよそしい言葉ではなく、方言も織り交ぜながら話してほしい。 ・その方が気仙沼出身であれば方言がいい(看護師さんは地方出身の人が多い)。
Oさん	回答	共通語	多少丁寧な方言	共通語	無回答
	理由	・意識はしていない。	・親しみがわく。	・理由は考えるのが難しい。	・その看護師が方言を使うかどうかによる。
	要望など		・こちらが分かるような方言なら親しみがあるので方言で話してほしいときがある。	・とにかく、難しい言葉でなく、わかりやすい言葉で症状や診断を砕いて話してほしい。	・わかりやすく話してほしい。 ・「痛かったですね「ここはこのようにしてたほうが痛み和らぎますよね」など話してもらえると嬉しい。

表9 介護場面における方言の印象

場面	介護施設でデイサービスを受ける		着替えの手伝いをしてもらう		
相手	顔なじみの介護士	初めて会う介護士	同居している家族	めったに会わない息子の嫁	
Yさん	回答	多少丁寧な方言	多少丁寧な方言	多少丁寧な方言	多少丁寧な方言
	理由	・おっかない言葉よりも優しい言葉を求めている。 ・慣れ親しんだ方言のほうがいい。	・きかねえ（おっかない）言葉よりも優しい方がいい。	・優しくされたい。 ・普段の方言だと言い方がきついため。	・優しさが欲しい。
	要望など				
Hさん	回答	方言	共通語	普段通りの方言	方言（方言が分かる人なら）
	理由	・方言のほうが、気さくにいろいろな話をできるから。		・家族だから気を遣うこともない。	・方言のほうが親しみがわき、スムーズにコミュニケーションがとれるから。
	要望など	・普段のことばで話してほしい。 (補足) お医者さんより気を遣わない。	・特別ことばにこだわらずに普段通りに話してほしい。 (補足) ・初めての方は慣れていないため少し構えることがあると思う。 ・過度な要求をするわけにはいかない。	・特段共通語で話す必要はない。	・そこまでこだわりはない。

*0 さんについては調査未実施

4.3.1 医療・介護場面において使われる方言の印象について

表8・9から、方言と共通語の印象について言及されている部分を抜き出して表にまとめると、以下のようになる。

表10 医療・介護場面における方言と共通語の印象

方言	共通語
①親しみを感じる (コミュニケーションを取りやすい、 本音を言える、気さくに話せる)	疎遠な感じがする (よそよそしい)
②(普段のことばだと)きつい	

① 親しみを感じる：シチュエーションは異なるものの、「方言で話してほしい」を選んだ際、理由や要望として、「親しみを感じるから」と答えているという点が、話者3名全員で共通している。さらにそこから、方言の利点として、コミュニケーションの取りやすさや、話のしやすさが利点として挙げられた。

② きつい：Yさんは、介護士と家族には多少丁寧な方言で話してほしいと答えており、その理由として、「普段の方言では言い方がきつい」「おっかない」と回答している。

このような気仙沼市での調査結果は、永田ら(2009)や日高(2007)の知見と同じ傾向を示すものである。医療・介護場面での方言使用は利用者に親しみを感じさせ、そのことが、医療・介護従事者と利用者との良好な関係を構築するための助けになるといえる。しかし、本調査で見られたように、利用者に対する方言使用は「きつい」印象を与えることにも注意される必要がある。

4.3.2 医療・介護場面で望まれることばについて

まず医療場面について考察する。表8より、医療場面の質問への回答について、シチュエーションごとの回答として方言を選ぶか共通語を選ぶかという点では話者によってばらつきがあったものの、その理由や要望などを述べる際に、わかりやすさやコミュニケーションの取りやすさを優先的に求めている点が複数の話者で共通していた。わかりやすさの観点では、共通語だから通じない、方言だから通じるなどの意見は見られず、むしろ、要望としては「医療用語、カタカナは通じないことがある」「難しい言葉は避けてほしい」など、専門用語への不安が複数聞かれた。

表9の介護場面では、Hさんの「初めて会う介護士」に対する回答を除いて、方言で話されることに好意的な結果となった。また、4.3.1で見たように、普段の方言では言い方がきついため、多少丁寧な方言のほうがいと答える場合でも、方言そのものの使用を避けてほしいという意見は見られなかった。

医療・介護のどちらの場面においても、「方言で話してほしい」が選ばれる際には理由として「親しみを感じる」「本音で話せる」などの具体的な意見が見られた。一方で、「共通語で話してほしい」と回答があったものでは、その理由や要望に関して、共通語の利点が具体的に述べられることはなく、「地元が気仙沼でない人に方言で話すことを求めるのも失礼なため」や「特別ことばにこだわらずに普段通り話してほしいから」という理由で、消去法で共通語が選ばれていることがあった。

以上から、医療・介護どちらの場面においても、方言で話されること自体は好意的に受け止められているのではないかと考えられる。その中で、医療場面では特に診断・症状を説明する際の「わかりやすさ」、介護場面では「優しい対応」に準ずることばが望まれることがある。

4.4 医療・介護場面における気仙沼方言の使用が利用者に与える印象のまとめ、今後の課題

本調査では、医療・介護場面で方言が使われた場合の印象について、対象を利用者として調査し、「親しみを感じる」一方で「きつい」印象を与えるという結果を得た。また、調査結果から、医療・介護場面で望まれることばについて考察した。医療・介護場面において、利用者は方言で話されること自体に対して好意的であり、医療場面ではさらに説明のわかりやすさが、介護場面では優しい対応が求められることがあるということが分かった。

今後の課題は、医療・介護場面において共通語と方言が与える印象のより詳細な比較である。同じシチュエーションの中で、「方言が使われたらどう感じるか」「共通語が使われたらどう感じるか」を尋ねるなど、調査項目を検討したい。

5 おわりに

以上、医療・介護場面における方言の問題について、話者の視点から調査をした。気仙沼方言話者は、医療・介護場面において、相手との親しさや方言が通じるかなど様々な要素で方言を使い分けており、相手に方言が通じないという理由で問題を感じることは無いといえる。一方医療・介護従事者側の方言使用については、方言への印象について「親しみを感じる」と「きつい」という両面が聞かれたが、きついという印象を持つ話者は丁寧な方言で話してほしいと話しており、方言そのものを避けて欲しいという意見はみられなかった。また、無理に方言を使用するのではなく相手に普段通りの言葉で話してほしいという意見もあり、方言による効果を感じているもののこだわりは見られず、中立的な立場であるといえる。先行研究は2010年より以前に行われた調査が多く、10年間でケアを受ける側の世代が変化したことも考慮に入れていきたい。また、今回は少人数への調査だったことから、職種による違いをみるのが難しかった。多人数への調査が今後の課題である。

現場における実践的な活用法として、話者が方言を使用する相手・場面で気仙沼方言の特徴が出現した際に、ケアをする側が理解できることが望ましいと考えられる。また、ケアする側の使用する言葉について、医療では「分かりやすい言葉」、介護では「優しい言葉」が望まれるといった意見もあり、このような要望に対しどのように方言を使用することが効果的かを考えていきたい。

文 献

- 木部暢子(1999)「共通語は万能ではない」佐藤和之・米田正人編『どうなる日本のことば—方言と共通語のゆくえ』大修館書店
- 小林隆(2018)「震災と言葉—被災地にとって方言とは何か？」東北大学教養教育院編『東北大学教養教育院叢書「大学と教養」第2巻 震災からの問い』東北大学出版会
- 東北大学方言研究センター(2011)『支援者のための気仙沼方言入門』「東日本大震災と方言ネット」(<https://www.sinsaihougen.jp/%E3%82%BB%E3%83%B3%E3%82%BF%E3%83%BC%E3%81%AE%E5%8F%96%E3%82%8A%E7%B5%84%E3%81%BF/>最終閲覧日：2024/01/17)
- 永田美和子・鈴木啓子・大城凌子(2009)「沖縄県やんばる地域の方言を使用した高齢者ケアの効果に関する研究—看護・介護職の方言使用の実態と課題の検討」『名桜大学総合研究』17
- 日高貢一郎(2007)「医療・福祉と方言」小林隆編『シリーズ方言学3 方言の機能』岩波書店
- 今村かほる・岩城裕之(2020)「介護における方言の課題」小林隆・今村かほる編『実践方言学第3巻 人間を支える方言』くろしお出版

音韻

小林 隆

1 調査の目的

今回の調査は、気仙沼市方言の音韻の概略を記述することを目的とする。

気仙沼市方言の音韻については、これまで当研究室の調査が 2 回行われている（A 調査、B 調査と称する）。その結果は次に報告されている。

A 調査：佐藤喜代治・加藤正信（1972）「三陸地方南部の言語調査報告」『日本文化研究所研究報告別巻』8・9（井上史雄ほか編『日本列島方言叢書 3 東北方言考②』ゆまに書房に収録）

→調査は 1966 年～1971 年。大島、鹿折、唐桑の 3 地点が調査対象。

B 調査：大橋純一（2012）「音韻」小林隆編『宮城県・岩手県三陸地方南部地域方言の研究』東北大学国語学研究室

→調査は 2005 年～2007 年。大島、鹿折、唐桑を含む気仙沼市が調査対象。

A 調査から B 調査までは 40 年弱の開きがあり、B 調査から今回の調査までは 20 年弱の開きがある。したがって、この間の変化について探ることも、今回の調査の目的に加えることができる。

2 調査の概略

調査 A は汎用的な調査票『東北方言音韻調査票』（東北大学文学部）に基づいており、調査 B の項目もそこに含まれている。それらの結果との比較の上でも、今回は『東北方言音韻調査票』の中から調査項目を選んだ。質問方法は「なぞなぞ式」であり、ミニマルペアの項目を多く配置している。質問の際、その事物の「絵」を補助的に利用することもあった。

話者は次の 2 名である。いずれも気仙沼市生まれ育ちで現在も気仙沼市にお住まいの方である。

話者 1 1938（昭和 13）年生まれ、85 歳、女性。

話者 2 1957（昭和 32）年生まれ、66 歳、女性。

調査員は筆者と学生であり、時折、質問者を交代しながら調査を進行した。

3 調査の結果

上記の A・B 調査の結果と比較しながら、今回の調査結果について述べる。A・B 調査は、調査内容が豊富な A 調査を中心に紹介し、B 調査でも取り上げた項目については、その情報を補う。各項目とも、まず、A・B 調査の結果を示し、次いで今回の調査の結果を提示する。

(1) 連母音「アイ」「アエ」の融合

A 調査では、共通語の「アイ」「アエ」に相当するものが[e:]の長音、または多少二重長音的な[ɛæ]に発音され、「エ」とは区別される。

蠅[he:] 塀[he:]

高い[take:] 時計[toke:]

苗[nekkō] 根[nekkō]

ただし、少し改まったり、はっきり、ゆっくり発音したりするときには[ai][ae]も現れる。一方、B 調査では高年層でも 4 割程度の話者が[e:]と発音し、本来の[e:]との区別がない。

今回の調査では、2 人の話者から[e:]の発音はまったく聞かれなかった。まず、話者 1 は次のようである。

蠅[hai][he:][he:kko] 塀[he:]

高い[takai][tage] 時計[toke:][toge]

苗[naikko][nai] 根[ne][nekkō]

[e:]は現れないが[e:]は現れ、その結果、本来の[e:]との区別が失われるときがある。また、[ae]が[ai]に発音され、両者の区別がない。

次に、話者 2 は次のように連母音の融合自体が見られなかった。

蠅[hae] 塀[he:]

高い[tagai] 時計[toge:]

苗[nae] 根[ne]

以上からすると、調査 A から調査 B にかけて[e:]が衰退し、[e:]に統合する現象が進んだが、さらに今回調査に向けて、連母音の融合自体が抑制されるようになってきたとみなすことができる。話者 2 が「兄なら蠅を[he:]と言うことがある」と述べる点は、この推定を支持する。ただし、連母音の融合を避けた発音では、[ae]が[ai]に統合される現象も生じている。

(2) 「イ」と「エ」の区別

A 調査では、共通語の「イ」にあたるものと「エ」にあたるものの大部分は、例えば、

苺・越後[etsiŋo]

息・駅[egi]

鯉・声[koe]

のように区別がなく、「エ」に統合されているが、若干の語、「胃」「胆」などに中舌母音の[i]が現れ、これは「絵」「柄」の[e]とははっきり区別されている。大島と唐桑でこの区別が観察されたが、鹿折では「エ」に統合されていた。

なお、「エ」にあたるものが、[j⁽²⁾e]のように発音の頭に摩擦を伴う場合も見られる（大島の「絵」「柄」が該当、唐桑の「柄」が該当）。

B 調査でも似たような状況だが、「イ」と「エ」の中間相で区別なし」が 4 割、「イ」寄りの相で区別なし」が 2 割弱ほど現れている。また、中年層以下では区別をする人が一気に増えている。

今回の場合、まず、話者 1 は次のようであり、区別がないか曖昧である。

胃[i] 柄[i] [ikko]

苺[itʃiŋo] 越後[itʃiŋo]

鯉[koi] 声[koi] ([i]は[e]にも聞こえる)

この場合、全体として「エ」よりも「イ (i)」に近く統合されている印象である。一方、話者 2 は次のように区別が認められる。

胃[i] 柄[e]

苺[itʃiŋo] 越後[etʃiŋo]

鯉[koi] 声[koe]

以上から、「イ」と「エ」の区別については、もともと区別の弱かった段階から区別のある段階に移行しつつあり、話者によってその状況が異なることがわかる。

(3) 「シ」「ス」、「チ」「ツ」、「ジ」「ズ」の区別

A 調査では、次のように区別がない（以下、[ɯ]の中舌音を[ü]で代用表記する）。

獅子・煤[süsü]

梨・茄子[nasü]

乳・土[tsüdzü]

口・靴[küdzü]

知事・地図[tsü~dzü]

くじ・屑[kü~dzü]

B 調査では 2 割の話者がこのようであり、4 割の話者は区別はあるものの中舌化が見られ、残りの 4 割の話者は中舌化もない状態である。中年層以下、一気に中舌音が聞こえなくなる。

今回の場合、話者 1 は次のようである。

獅子[ʃiʃi][süsü(odori)] 煤[susu][süsü]

梨[nasü] 茄子[nasü]

乳[odzuko][odzikko][tsütsikko] 土[tsudzü]

口[kudzü][küdzü] 靴[küdzü]

知事[tʃidzi] [tʃidzi] 地図[tʃidzu]

くじ[kudzü] [kudzü] 屑[kudzu][kudzü(kajo)]

語のペアにより現れ方がさまざまであるが、「中舌化があり区別もない」「中舌化はあるが区別はある」「中舌化はなく区別もある」の 3 段階が混在して現れているようにも見える。このうち、「梨」「茄子」のペアに見られるような「中舌化があり区別もない」段階は話者の親の世代の発音を思い出して答えているようであり、話者 1 自身は「中舌化はあるが区別はある」と「中舌化はなく区別

もある」の中間に位置すると考えられる。

次に、話者 2 は次のようである。

獅子[ʃif i][süsü(mai)] 煤[susu]

梨[naʃ i][nasü] 茄子[nasu]

乳[tʃitʃ i] 土[tsutʃ i]

口[kutʃ i] 靴[kudzü]

知事[tʃidzi] [tʃidzi] 地図[tʃidzu]

くじ[kudzi] 屑[kudzu]

中舌音の発音は話者より上の世代の発音を真似て回答したものだという。したがって、話者 2 自身は「中舌化はなく区別もある」段階にあるとみなしてよい。

以上、「シ」「ス」、「チ」「ツ」、「ジ」「ズ」の区別については、今回の調査結果は B 調査と似たような状況、ないしは、それがさらに進んだ状況にあると考えられる。

(4) カ行・タ行子音の有声化

A 調査では、母音に挟まれたカ行・タ行子音は、

開ける[agerü]

旗[hada]

口[küʃsü]

のように有声音で発音されるのが普通である。ただし、無声音の直後では「七」[sütsü]のように無声音のままである傾向が強い。ただし、「聞く」[kigü]のような例もあることはある。直前が促音、撥音の場合も「三日」[mikka]、「弁当箱」[bentobaŋo]のように有声化しない。B 調査でもこれらの有声化は顕著であり、少年層にもかなりの割合で現れている。

今回の場合、話者 1 の状況は次のようであった。ミニマルペアとして調査した、共通語で有声音の語の結果も合わせて示しておく。

開ける[akeru][ageru] 上げる[aŋeru]

旗[hata][haʦa] 肌[hada]

糸[ito] 井戸[ido]

蜜[mitsu] 水[midzu]

「開ける」「旗」は無声音と有声音の両方が現れているが、前者の無声音が第 1 回答であり、「濁りませんか」と確認すると、少し考えてから後者の有声音が回答された。しかし、そのような確認を行わなかった「糸」「蜜」には有声音は現れなかった。この点からすると、話者 1 にとっては有声化の傾向は弱く、共通語で有声音の語と明瞭な区別があるように思われる。しかし、これらの項目よりも先に行った「チ」「ツ」、「ジ」「ズ」の調査では次のように有声化が生じており、その点では本来の有声音の語との区別がつかない。

口[kudzü][küdzi] くじ[kudzi] [kudzü]

靴[kudzü] 屑[kudzu][kudzï(kaŋo)]

この項目群と先の項目群では調査者が別であることも考えると、話者1はもともと有声化を持っていたが、共通語等の影響でその傾向が弱まり、ちょっとした調査環境の変化で、それが現れたり現れなかったりするといった不安定な状況になっているのではないかと考えられる。

次に、話者2は次のような回答状況であった。

開ける[ageru] 上げる[aŋeru]

旗[hada][hadako] 肌[hada]

糸[ido][idokko] 井戸[ido]

口[kutʃi] くじ[kudzï]

蜜[mitsu] 水[midzu]

靴[kudzü] 屑[kudzu]

これを見ると、話者1よりも有声化がやや強く現れているように見えるが、それが起こったり起こらなかったりしており、やはり不安定さが感じられる。なお、話者2は「シ」「ス」などの区別の項目では、中舌音は「上の世代の発音を真似たもの」と言っていたが、この項目ではそうした指摘はなかった。ハ行子音の項目である「百」では「自分たちの世代も[çagu]のように言う」と述べており、「シ」「ス」などの区別に比べると、カ行・タ行子音の有声化はその特徴が強く残っていると考えてよいかもしれない。

なお、無声音の直後（「七」）や直前が促音（「三日」「張った」）・撥音（「三角」「弁当箱」）の場合には話者1・2とも有声化が起こらないが、「聞く」については、話者2に有声化が確認された。

以上からすると、カ行・タ行子音の有声化は、特殊な環境を除き、A調査・B調査においてはほぼ規則的に生じていたが、今回の調査ではそれが弱くなり、無声音のまま発音される傾向が出てきているということにある。従来、有声化は根強く残りやすい現象であると言われてきたが、ここに来て、それが盤石ではなくなってきているとみなしてよいだろう。

(5) ガ行・ザ行・ダ行・バ行子音の鼻音化

A調査では、語中のガ行子音は鼻音化した[ŋ]であり、ザ・ダ・バ行の子音は鼻音を伴って発音される。タ行とダ行の区別は、

旗[haŋa] 肌[ha~da]

糸[eŋo] 井戸[e~do]

のように直前に軽い鼻音を伴うことによって可能である。ただし、

密[midzü] 水[midzü]

のように区別のない場合もある。大島、鹿折ではこれらの鼻音は観察されない。

B調査でもガ行は[ŋ]であり、カ行の有声化子音[g]との区別は明瞭に存在する。一方、ダ行音では鼻音化はまったく認められず、「旗」「肌」ともに[hada]となっている。

今回の調査では、ガ行については前節で取り上げたように、2名の話者とも鼻音[ŋ]であり、有声

化したカ行の[g]とは明確に区別がなされている。一方、ザ・ダ行の子音には鼻音が伴わず、[d]のままであり、その結果、前節で見た話者1の「口」[kudzĩ]と「くじ」[kudzĩ]、靴[kudzũ]と屑[kudzũ]、話者2の「靴」[kudzũ]と「屑」[kudzũ]、「旗」[hada]と「肌」[hada]、「糸」[ido]と「井戸」[ido]のように両者とも非鼻音の有声音でその区別が失われることがある。さらに、バ行も同じく次のように鼻音は観察されない。これは2名の話者とも同様である。

首[kubi]

帯[obi]

壁[kabe]

以上からすると、ガ行・ザ行・ダ行・バ行子音の鼻音化については、ガ行鼻音のみが現在も強固に残っているものの、その他については、A調査の段階ですでにその特徴が弱まっていたものがB調査の段階ではほぼ完全に消滅し、現在も同様の状態にあるとみなすことができる。

(6) ハ行子音の音相

A調査では、

髭[ɸĩje][fĩje]

紐[fĩmo]

のように両唇摩擦音の「フィ」や口蓋化音の「シ」に近い音声が聞かれる（「霜」は[sũmo]で区別あり）。

今回の調査では、話者1・2とも、

髭[çije]

であり、上記の特徴は現れてこなかった。ただし、話者2からは、上の世代では、「髭」[fĩje]、紐[fĩmo]、あひる[afĩru]のように言うという指摘も得られている。このことから、かつて存在した「ヒ」が「フィ」や「シ」になる現象は、現在では失われたと考えられる。

なお、A調査の段階でどうだったのかは明らかではないが、今回は他のハ行音についても話者2人は次のようであり、両唇摩擦音は聞かれなかった。

蛇[hebi]

百[çaku]ないし[çagu]

(7) 「キ」の子音の音相

A調査では、多少口蓋化、摩擦化して[kçĩ][jĩ]のような傾向がある。大島では「チ」に近い音も聞かれる。

今回の調査では、話者1・2とも、

着る[kiru]

であり、「散る」[tçĩru]とは明確に区別されている。話者2によれば、「キ」が「チ」になる特徴は、上の世代からも聞かれなかったという。A調査の段階では存在していた特徴が、その後、一気に衰

退したと考えられる。

(8) カ行合拗音の出現

A 調査では、唐桑で[kwa]の発音が「火事」「西瓜」に認められる。

今回の調査では、話者 1・2 とも次のようであり、この特徴は現れてこなかった。

火事・舵[kadzɪ]

西瓜[suika]ないし[suiɕa]

薬缶[jakan]ないし[jagan]

この特徴も、A 調査段階から現在に至る間に急速に消滅に向かったと思われる。

(9) 「セ」「ゼ」の子音の音相

A 調査では、「シェ」「ジェ」に近い発音は唐桑で多少聞かれる程度である。唐桑では、「背中」が [sɛnaga] とかすかに口蓋化する。

今回の調査では、話者 1・2 とも、

背中[sɛnaka]

汗[ase]

であり、話者 2 によれば、祖父母の代でもこの特徴は聞かれなかったという。もともと弱かった特徴が、その後、完全に消えてしまったと考えられる。

(10) 特殊拍の音相

A 調査では、長音、促音、撥音は拍として認められるものの、共通語と比べて音声的にも意識的にも、独立性が弱いようである。例えば、

通す[toːsɯ]

切った[kɪˈta]

新聞[sɪ̃ː bũ̃ː]

などを「トス」「キタ」「シブ」とははっきり区別するものの、これらを 2 拍と意識するのが普通である。

今回の調査では、話者 2 については、

十[toː] 戸[to]

切った[kitta] 北[kɪta]

新聞[ʃɪmbun] 洪[ʃibu]

のように長音、促音、撥音が 1 拍分の長さが確保されており、拍意識も明瞭であった。この点は、話者 1 もほぼ同様であると言ってよい。特殊拍が短く発音される傾向は、現代ではほぼ消えたのみならず、なしてよさそうである。

4 まとめ

最後に全体の結果を簡潔に整理しておこう。

調査 項目	A調査 (1966～71年)	B調査 (2005～07年)	今回調査 (2023年)
(1) 連母音「アイ」「アエ」の融合	[ɛ:]の発音が行われ、[e:]との区別がある。	[ɛ:]の発音が衰退し、[e:]との区別がなくなりつつある。	[ɛ:]の発音は消滅し、[e:]ないし[ai][ae]で発音される。
(2) 「イ」と「エ」の区別	区別なく[e]と発音されるが、一部に[i]と[e]で区別される場合もある。	区別のない人が多いが、中年層以下で区別をする人が増える。	両方を[i]と発音し区別しない人と、[i]と[e]で区別する人がいる。
(3) 「シ」「ス」、「チ」「ツ」、「ジ」「ズ」の区別	[sü][tsü][dzü]で統合され、区別がない。	左のように区別しない人と、区別はするが中舌音は残る人がおり、中年層以下は中舌音も聞こえない人が増える。	中舌音は消え、明瞭に区別される段階に至ったが、中舌音をある程度残す人もいる。
(4) カ行・タ行子音の有声化	特殊な場合を除き、規則的に有声化する。	左の状況と同じであり、少年層にも根強く現れる。	有声化は弱まり、無声音のまま発音される傾向が出てきている。
(5) ガ行・ザ行・ダ行・バ行子音の鼻音化	ガ行は鼻音化した[n]である。ザ・ダ・バ行は鼻音を伴うが、そうでない場合もあり、衰退が始まっている。	ガ行については左の状況と同じであるが、その他は鼻音が消えるに至る。	ガ行の鼻音は強固に残っている。その他も左と同じ状況である。
(6) ハ行子音の音相	「ヒ」の子音が[ɸ]ないし[j]のように発音される。		左のような現象は消滅し、[ç]で発音される。
(7) 「キ」の子音の音相	多少口蓋化・摩擦化して[kç][j]のようになる傾向がある。		左のような現象は消滅し、[k]で発音される。
(8) カ行合拗音の出現	[kwa]の発音が聞かれることがある。		左のような現象は消滅し、[ka]と発音される。
(9) 「セ」「ゼ」の子音の音相	「シェ」「ジェ」のようにかすかに口蓋化する発音が一部に聞かれる程度である。		左のような現象は消滅し、[se][dze]と発音される。
(10) 特殊拍の音相	長音、促音、撥音が短く、独立性が弱い。		長音、促音、撥音は1拍分の長さが確保されており、拍意識も明瞭になっている。

文 献

大橋純一 (2012) 「音韻」 小林隆編 『宮城県・岩手県三陸地方南部地域方言の研究』 東北大学国語学研究室

佐藤喜代治・加藤正信 (1972) 「三陸地方南部の言語調査報告」 『日本文化研究所研究報告別巻』 8・9 (井上史雄ほか編 『日本列島方言叢書 3 東北方言考②』 ゆまに書房に収録)

テンス・アスペクト

津田 智史

1 はじめに

本稿は、2023 年度実施の宮城県気仙沼市方言調査のうち、高年層を対象とした当該方言のテンス・アスペクトの項目について、調査結果を報告するものである。調査項目は、同地域を対象として執筆者が担当した 2017 年、2018 年におこなったテンス・アスペクトにかかわる調査に準じている。2017 年、2018 年の調査結果については、津田（2019a）として報告済みである。

本稿では、当該地域をあつかう津田（2019a）の報告内容に加え、2023 年におこなった調査結果のデータを加えて種々の時間表現にかかわる用法について確認をしていく。今回の調査は津田（2019 a）の調査から 5 年ほど経過しているものの、インフォーマントの回答には大きな差がみられるわけでもないため、取り立てて明記しない限り津田（2019a）のデータと等価としてあつかう。また、津田（2019a）の報告では言及していなかった用法についてもあつかい、当該方言のテンス・アスペクトの実態について解像度を上げて報告するものである。

なお、本稿の用例の表記は、2023 年調査の回答を主に示すこととする。また、テンス・アスペクトなど時間表現を含む該当箇所をカタカナ（下線付き）で示し、その共通語訳について文の後に（ ）で示すことにする。

2 調査の概要

2.1 調査の概要・インフォーマント

2023 年調査では、気仙沼市方言のテンス・アスペクトなど時間表現に関する形式や用法を明らかにするための調査をおこなった。共通語翻訳式でおこない、場面設定と共通語の例文を提示し、日常的に使用する当該方言に翻訳して実際に発音してもらった。事前に先行研究などから、類似語形などを参照しており、その確認も適宜おこなった。

インフォーマントについては、次の一覧を参照されたい。2023 年調査では、2 名のインフォーマント（男女 1 名ずつ）に対して調査をおこなった（ID5 および 6）。本稿では、ID5、ID6 の高年層 2 名に加え、津田（2019a）であつかった ID1～4 のインフォーマントのデータを合わせて検討することにし、当該方言における時間表現の諸相について述べる。

下記一覧のインフォーマント情報をみてもわかるように、津田（2019a）のインフォーマントと 2023 年調査のインフォーマントとを比較すると生年としては ID2 と ID5 に 15 年の差がある。しかし、調査結果には大きく回答に差はみられず、本稿ではとくに指定しない限り分けてあつかうこ

とはしない。加えて、ID2 のインフォーマントについては、外住歴が長く、言語形成期も他地域で生活されていることが一覧からわかるが、調査結果をみるとほかのインフォーマントとほぼ同様の回答となっている。本稿ではほかのインフォーマントと同様にあつかい、考察の対象とする。

ID	生年	性別	年齢 (調査時)	外住歴 (気仙沼市以外)	調査年
1	1944 (昭和 19) 年	女	73	15 歳～17 歳：宮城県仙台市	2017 年
2	1936 (昭和 11) 年	男	80	福岡県門司出身 13 歳～15 歳および 21 歳以降 宮城県気仙沼市在住	2017 年
3	1940 (昭和 15) 年	男	78	18 歳～19 歳：静岡県	2018 年
4	1949 (昭和 24) 年	男	69	18 歳～22 歳：東京都	2018 年
5	1951 (昭和 26) 年	男	72	なし	2023 年
6	1944 (昭和 19) 年	女	79	なし	2023 年

2.2 先行研究など

宮城県方言の時間表現に関する報告には、次のようなものがある。登米郡中田町を対象とした工藤ほか (2005) および八亀ほか (2005) や、仙台市の竹田・吉田 (2000)、石巻市の竹田 (2003)、また山形県最上地方と宮城県北部を結ぶ陸羽東線沿線地域を対象とした竹田 (2011) および津田 (2011) などである。いずれも、テンス・アスペクトにかかわるさまざまな時間的局面について、該当する方言でどのような形式が使用されるか、その形式がどのような意味用法を表すことができるかについて論じている。

また、本稿であつかう気仙沼市方言を対象としたものには 2005 年～2007 年におこなわれた東北大学国語学研究室の気仙沼市・南三陸地方での方言調査の報告である竹田 (2012)、2017 年および 2018 年におこなわれた同研究室の気仙沼市での方言調査の報告である津田 (2019a・2019b) などがある。

本稿であつかうのは、2023 年に実施された当地方言の調査で得られたデータ、および 2017 年、2018 年実施の調査で得られた調査データである (いずれも東北大学国語学研究室主催の調査)。執筆者が設計した 2023 年調査の調査項目は 2017・2018 年調査を基に設計しており、多くの項目が共通している (一部、アスペクトの周縁的形式にかかわる調査項目については、調査文を変更した)。先述したように、津田 (2019a) は一部の内容—タ形とタッタ形の使用差や意味の違い、またアスペクト周縁的形式の用法—に着目して報告したものであり、調査項目すべてについて報告したわけではない。本稿では、津田 (2019a) で報告した内容に 2023 年調査の結果を加えて再報告するとともに、そこであつかわなかった項目も新たに追加して報告するものとする。その際、津田 (2019a) に含まれない調査データについては、2017・2018 年調査のデータとして示す。

3 調査結果①—時間表現の様相

3.1 存在動詞の用法

3.1.1 テンス現在

当該方言においては、存在動詞のテンス現在はイルとイダが使用される。2023 年調査でも津田 (2019a) と同様の様相を呈す。

(1) [友人の家を訪ねて、入り口で] ○○さん、イルノスカ/イダノスカ。(いますか)

(1) は ID5 の回答である。ID6 は「○○さん、イル/イダ。」と使用しており、イルは上昇調、イダは上昇調でも下降調でも使用できるようである。上昇調と下降調の違いについてはインフォーマント自身でその違いを言語化できていなかった。この音調の使い分けについては、今後の課題である。また、ID6 の内省によると、年上には「イダイガ」と使用するという。

3.1.2 恒常的事実

存在動詞のテンス現在であっても、イダが使用できない場合がある。津田 (2019a) でも示したように、それはたとえば恒常的事実を表す場合である。

(2) [孫に「サメはどこにいるの」と聞かれて]

サメは、海に インダゾ/*イダンダゾ。(いるよ)

サメは一般的に海にいる、という不変の事実を述べる場合、イダは使用不可である。仮にイダを使用する場合、それは過去にいた、という内容になるという内省を得た (ID6)。

3.1.3 習慣的な存在

ほかにも、イダが使用できず、イルのみ使用できる場合がある。習慣的な存在を述べる場合がそれである。

(3) [友人に「最近は何をしているのか」と聞かれて]

(もう仕事はしていないし、) 毎日家に イッテバ/*イダデバ。(いるよ)

(3) は ID6 の回答である。ID5 は「毎日 イルツチャヤー」のように言うと言っている。いずれの話者も「イダ」だと使用できないという。津田 (2019a) では取り上げなかったが、これは 2017・2018 調査においても同様である。

3.2 運動動詞の用法

3.2.1 完成相過去

続いて運動動詞についてみていく。運動動詞の完成相過去において、東北方言ではタ形とタッタ形が用いられる地域がある。その場合タ形とタッタ形で意味を分けることが報告されている。タッタ形は現在と出来事の断絶性を表し、タ形は出来事がすでに起こったことを明示するが、現在と出来事の関係に積極的には触れない。

まず最初に「もらう」についてみる。

(4) [隣からもらった水蜜を手を持って]

隣から、きれいな水蜜を モラッタゾ/*モラッタッタゾ。(もらったよ)

津田 (2019a) においても、2023 年調査においても、当該場面ではタ形の使用は確認できるが、タッタ形の使用は確認できない。これは桃があるという事実がタッタ形の表す現在との断絶性にそぐわないためであろう。津田 (2019a) でも述べたが、タッタ形は「今はない」ということや、事態が起こったのがずっと前であることを示すために用いられるようである。一方で、先行研究の意味分けを参考にすると、「[もらった水蜜を食べた後に報告して] 隣から、きれいな水蜜をもらった。」という場合については、タッタ形が使用されることが想定される。しかしながら、津田 (2019a)、2023 年調査ともに状況を説明するような「もらったけど、食べてしまった」のような表現が使用されやすいという結果となった。

もうひとつ別の動詞で確認してみよう。次にみるのは「走る」である。

(5) [友人に話して]

昨日、運動会で ハシッタ (ハセダ) デバ/*ハシッタッタデバ。(走りましたよ)

この場合にも、2017・2018 調査および 2023 年調査でタッタ形は使用できない。ただし、「ハシッタッタ (ナー)」という思い出しであれば使用可能という内省を得た (ID4)。遠い過去となるとタッタ形が使用可能となるということである。

3.2.2 継続相現在

次に、運動動詞の継続相現在についてみてみる。継続相現在においては、テル形やテダ形が使用される。まず「書く」についてみてみる。

(6) [今、何をしているのか尋ねられ]

お世話になっている人へ、手紙を カイトンダ/カイトダンダ。(書いているのよ)

東北方言において、テダ形は継続相現在だけでなく継続相過去でも使用される。(6) においては、カイトンダも、カイトダンダも意味の違いはないという内省であった (ID5)。テル形およびテダ形が使用できるというのは、津田 (2019a) の報告と重なるものである。

さらに別の動詞でもみてみよう。「(花が) 散る」である。

(7) [桜の花が、今まさに、散っている最中なのを見て]

今、花が チッテツゾ/チッテダナ。(散っているな)

この場面では、回答にゆれがみられた。テル形とテダ形が確認できたのは ID3、ID4 のインフォーマントである。ID2、ID6 についてはテル形を使用できるが、テダ形の使用は確認できなかった。ID1 と ID5 は、テル形やテダ形を用いずに、「チッテキタネー/チリハジメタ/モーオワルナ」など、場面分析的な表現を使用している。これらの分析的な表現は、ほかのインフォーマントにもみられた。

3.2.3 継続相過去

津田 (2019a) では、継続相過去においてテダ形が主に使用されており、テダッタ形は思い出しの場合に使用がみられた (ID4)。竹田 (2012) においては、テダ形とテダッタ形は意味用法において対立を示すとされており、「動詞+テダは現在の出来事に用いられることもあるため、動詞+テダッタのほうが出来事としてより過去らしい表現である」と述べている。

(8) [昨日の夕方何をしていたのか尋ねられ]

お世話になった人への手紙を カイテダダ / カイデダノッサ。(書いていたんだよ)

2023年調査においては、(8)のようにテダ形のみ使用が確認できた (ID6)。ID5については「タヨリカキ シテダヨ」というように動詞「書く」での回答は得られなかったが、昨日の夕方電話したのに出なかったことを問われた際には「タヨリカキ シテダッタモノ」というようにタッタ形を回答できると内省している。

3.2.4 結果相現在

継続相は、動作や変化の継続状態 (進行相) を表す局面と結果状態 (結果相) を表す局面に細分化できる。西日本方言の多くはこれらの局面を言い分ける形式を持つが、東日本方言では特段形式を区別せずに「動詞テ形+存在動詞」の形式 (テル形やテダ形) でいずれの局面も表すことができるとされる (工藤 2014)。

(9) [前の晩に雨が降って地面に落ちてしまった桜の花びらを見て]

花が チッテシマッタ / オワッタッチャ。(散っている)

ここでは、テル形やテダ形がみられず、(9)のように花が「散った」ことに対して残念な感情を表出するような回答が得られた。この調査文に対しては、唯一ID1のみチッテダの回答がみられた。なお、この項目は『方言文法全国地図』(以下、GAJ)の「散っている (結果態^{註1})」の調査質問文を援用したものである。津田 (2020) はこの地図を示し、東北に「散ってしまっている」の回答が多くみられることを述べている。

この点に関して、小林 (2007) はGAJをもとに日本全国の文法形式を概観すると、東北や九州、琉球などの地理的周縁部において心情的な表現によって文法的な意味を表す傾向があることを示している。また、津田 (2020) は「時間的意味を表す際に、その時間的な局面をそのまま提示するのではなく心情寄りにとらえ直して、終助詞で言い表したり、心情を表す表現を添えて言い表したりすることがおこなわれる地域がありそうである」ことを述べている。

3.2.5 過去回想

過去を回想する場合、東北方言ではタッタ形やタ形+ケ (タッケ) が用いられる。GAJの「昔、二人で祭りに行ったなあ」の地図をみると、気仙沼市ではタッケの形が回答されている。2017・2018年調査、2023年調査のいずれも、GAJと同一調査文での調査をおこなったところ、イッタッタとイッタッケの両方を回答するインフォーマントが多かったが (ID3~6)、ID5についてはタッタ形

をあまり使用しないということであった。また、ID2 からイッタッタは直接の思い出を語るときに使用する、ID1 からは今祭りを見ている場合にイッタツケを用いるという内省を得た。

加えて、一人称の回想表現の調査もおこなった。

(10) [友人と昔の思い出話をしながら]

昔は、私はよくあの川に釣りに イッタッタナー／イッタツケネー。(行ったなあ)

こちらはイッタッタ、イッタツケのいずれも回答が確認できた。竹田 (2012) でも「昔、私は千葉県の九十九里浜に行ったなあ。」という調査文で、気仙沼市周辺でイッタッタとイッタツケが併用回答されている。過去の回想において、当該方言ではタッタ形とタツケの併用が一般的であることがわかる。

それでは、タッタ形とタツケに使い分けはあるのか。ID5 からは、イッタッタは体験した内容について述べ、イッタツケは思い出すように述べるという内省を得た。また、ID3、ID6 からは、イッタッタは複数人 (2 人以上、一緒に) で共有する過去の思い出の場合に使用するという内省が得られた。これらのことから、タッタ形は体験的な思い出やその共有、タツケは単純な思い出しという使い分けが想定できる。

3.3 形容詞の用法

形容詞のテンス過去については、2023 年調査では形容詞のタ形で表された。竹田 (2012) でも同様の結果を示している。

(11) [昔の相撲大会のことを思い出しながら]

あいつはずいぶん ツヨガッタヨナー／ツヨイガッタナ。(強かった)

ただし、津田 (2019a) では、形容詞のタッタ形(ツヨガッタッタ)を用いる場合もみられた (ID2、ID4)。タッタ形を使用する場合、かなり昔の話、もう死んでしまった人の話などのような含意を表すようである。

4 調査結果②—周辺的な形式

4.1 「(危なく) シタ」形式

過去における実際には実現しなかった事態を表す「(危なく) シタ」形式が気仙沼市方言では確認できる (津田 2019a・2019b)。津田 (2019a) では、「[倉庫で作業していると、外から鍵を閉められそうになり] アブナグ 鍵を カケライタなあ。(もう少しで閉められるところだった)」のデータを示し、ID2 および ID4 が使用していることを示した。「(危なく) シタ」形式がみられるものの、「カケラレットコダッタ」などの形式も合わせてみられた。

(12) [縁側に干していた魚を野良猫が狙っていたので追い払ったことを伝えて]

アブナグ 魚が トライタ／トラレダ。(もう少しでとられるところだった)

この状況において、アブナグの要素は必須である。合わせて、2023 年調査でも「トラレットコダッ

タ／モツテグトコダッタノッサ」などのように、「～するところだ」という表現がみられた。これは、津田（2020）が示すように文法的な内容を語彙的な要素（トコロ）を用いて表すものであり、小林（2007）ではやはり地理的周辺部にみられる特徴であるとする。

4.2 「一カタ」形式

「一カタ」形式は、南九州地方では動作の継続を表す場合に使用される一方で、東北方言では繰り返しや一回的ではない動作を含む場合に用いられる（津田 2016）。

(14) 孫が母親の真似をして、お皿を フキカタスル。(拭く行為をする)

「拭く」動作が複数（回）であったり、「拭く」枚数が複数であったりすることが必須であり、繰り返しの動作といったことを表す。ただし、波線部からもわかるように「一カタ」形式単独で述語となることはできず、必ず動詞を必要とする。インフォーマントの内省なども含め、2023年調査の結果は津田（2019a）の報告と合致する。

4.3 テアルク形式

テアルク形式は、琉球方言圏でみられる。琉球方言では地域によって、動作の継続を表したり、反復など複数の動作が進行している様を表したり、習慣的な動作を表したりする。いわゆる時間的な意味で使用されていることがわかる。しかしながら、東北方言では「移動する（ヌテアルグンダスケ：[間を]縫って移動するのだから）」や「回る（カゲテ アルッタモンダナ？：掛けて回ったものだね?）」のように（津田 2016）、時間的な意味ではなく空間的な意味で使用される。

(15) 朝市で、いろいろな野菜を カッテアルグ。(買って回る)

2023年調査の際に調査文を変更したために、データは ID5、ID6 の 2 名分しかないが、いずれも空間的に「(前接の動詞の表す事態をおこないながら) 回る」という意味でテアルク形式を使用している。

5 おわりに

以上、本稿では、2017・2018年調査の報告である（津田 2019a）に、2023年調査のデータを追加して、気仙沼市方言における時間表現の様相について報告した。また、津田（2019a）であつかった報告を追記するとともに、そこであつかわなかった項目についても新たに報告し、当該方言の時間表現全体の解像度を上げて報告した。本稿の内容は、報告の域を出ず、先行研究で述べられている内容に追随するものがほとんどである。しかしながら、それは先行研究の論の補強となるということである。

本稿をまとめるにあたり、同一場面における形式の使い分けなど、インフォーマントの内容をとおして、みえてきたものがあつた。さらに、時間的局面的なかでどのような表現を選択するのかといった表現選択のレベルの地域的特徴についても、先行研究の考察と一致する結果がみられた。今後も気仙沼市方言における時間表現について、さまざまな角度から調査をおこない、より詳細に当

該方言の時間表現の全体像を描き出せるよう、考察を深めていきたい。なお、本稿であつかいきれなかった内容も多くある。それらはすべて今後の課題である。

注

- 1 アスペクトの訳には「態」や「相」があてられる。GAJにおいては「態」と訳されているが、多くのアスペクト研究では「相」とされている。これは訳の問題であり、表している時間的局面や表している内容に違いがあるわけではない。

文 献

- 工藤真由美 (2014) 『ムード・テンス・アスペクト論』 ひつじ書房
- 工藤真由美・佐藤里美・八亀裕美 (2005) 「体験的過去をめぐって—宮城県登米郡中田町方言の述語構造—」 『阪大日本語研究』 17
- 国立国語研究所編 (1999) 『方言文法全国地図 第4集』 財務省印刷局
- 小林隆 (2007) 「文法的発想の地域差と日本語史」 『日本語学』 26(11)
- 竹田晃子 (2003) 「石巻市におけるテンス・アスペクト—体系と属性差—」 小林隆編 『宮城県石巻市方言の研究』 東北大学国語学研究室
- 竹田晃子 (2011) 「テンス形式および文末の「ケ」の用法」 小林隆編 『宮城県・山形県陸羽東線沿線地域方言の研究』 東北大学国語学研究室
- 竹田晃子 (2012) 「テンス・アスペクト」 小林隆編 『宮城県・岩手県三陸地方南部地域方言の研究』 東北大学国語学研究室 (竹田 2020 に再録)
- 竹田晃子 (2020) 『東北方言における述部文法形式』 ひつじ書房
- 竹田晃子・吉田雅昭 (2000) 「仙台市方言におけるテンス・アスペクト」 小林隆編 『宮城県仙台市方言の研究』 東北大学国語学研究室
- 津田智史 (2011) 「テンス形式「ーカッタ」」 小林隆編 『宮城県・山形県陸羽東線沿線地域方言の研究』 東北大学国語学研究室
- 津田智史 (2016) 『方言アスペクト研究の新たな視点』 (特別研究員奨励費成果報告書)
- 津田智史 (2019a) 「テンス・アスペクト」 東北大学方言研究センター編 『被災地方言の保存・継承のための方言の記録と公開 2』 文化庁委託事業報告書
- 津田智史 (2019b) 「アスペクトの周縁的意味—「(危なく) シタ」形式をめぐって—」 小林隆編 『生活を伝える方言会話』 ひつじ書房
- 津田智史 (2020) 「時間表現にみる事態認識と文法的発想の地域差」 第 111 回日本方言研究会発表予稿集
- 八亀裕美・佐藤里美・工藤真由美 (2005) 「宮城県登米郡中田町方言の述語のパラダイム：方言のアスペクト・テンス・ムード体系記述の試み」 『日本語の研究』 1(1)

推量表現とその周辺に用いられる形式の特徴

竹田 晃子

1 調査の目的

日本語諸方言において推量表現に用いられる形式の経年変化について、1980年頃（国立国語研究所 1994・2002）から2010年頃（大西拓一郎編 2016）の方言分布を比較し、地理的分布から読み取れる変化とその理由を考察した船木礼子（2017）には次のようにある。

ある地域に併用形が多いとき、地域共通語的な性格を持った一形式に次第に収斂して、まとまった分布を維持することや、隣接地域から異なった推量表現体系の形式が入り込むことで、単なる語の置き換えを経て意味的対立構造の崩壊などが起き得ること、また接続の単純化や汎用化が進んでいない推量表現形式は衰退しやすいことを述べた。（船木 2017：125）

また、全国的には否定疑問形式が増えているのに対して、東北地方においては、否定疑問形式の増加がそれほど多くなく、青森・秋田に「～ビョン」、岩手に「～ゴッタ」が増えてきたことを指摘している（船木礼子 2017：109）。このうち「～ゴッタ」は、青森県旧南部藩地域から岩手県旧南部藩地域にかけて分布する形式である（船木礼子 2017・高田祥司 2011）。宮城県気仙沼市においては、その仲間とみられる「～ゴデア」などの形があり、談話資料^{註1}の分析から推量表現に用いられることが指摘されている（竹田晃子 2019）。しかし、この地域では「～ベ／ペ」なども併用されており、違いは不明である。

そこで、本稿では、宮城県気仙沼市の伝統的方言における推量表現に用いられる形式について確認する。具体的には、他の形式との関係、融合推量形式の有無と用法、副詞との共起などである。本稿は接続や共起関係など形式的な特徴の確認にとどまるもので、意味や表現のニュアンスには深く立ち入らず、次回以降の調査での課題とする。

調査については、東北大学文学部国語学研究室の主催でおこなわれた臨地調査に筆者が参加、2023年8月9日・10日に、高年層話者〔70代男性〕〔60代女性A〕〔60代女性B〕にご協力いただき、面接調査を実施した。なお、表記について、得られた語形をカタカナの表音表記で示し、入れ替え可能な併用形式を／で区切り、省略されることのある部分を（ ）で示す。場面説明を例文の前に〔 〕に入れて示した場合がある。

2 語形と調査例文

2.1 語形

気仙沼市方言で用いられる可能性がある語形については、2012談話資料の分析（竹田晃子 2019）

で確認された語形がある。接続や考えられる由来、談話資料での主な語例を次にあげる。

- 【1】**ベ類**：終止形相当の述語に接続する。ラ行五段動詞に付くときは(ッ)ペになる場合があり、名詞に接続する際はダが前接する。語例：イクべ（行くだろう）、アッぺ（あるだろう）、イーべ（良いだろう）、ナイべ（ないだろう）、ナンダべー（何だろう）など。
- 【2】**イ類**：べに由来する形で、イヤエのように発音される。終助詞チャ／ネ／ナなどが後接することが多い。語例：オロシタンダい（落としたんだろう）、アルいツチャ（あるだろうよ）、イーンダいネー（良いんだろうね）、ラクダいツチャナ（楽だろうな）など。
- 【3】**ベオン類**：上記のべに終助詞モノが付いたベモノという形と、融合が進んだベオンやビオンがあり、併用されているとみられる。語例：シタべモノ（しただろうね）、イタベオン（いただろうね）、イーベオン（良いだろうね）、ダイジョブダべオン（大丈夫だろうよ）、デッタビオン（出ているだろう）、ダイジョブダッタビオン（大丈夫だったろう）など。
- 【4】**ゴッテ類**：コトダ由来のゴッタの仲間とみられる。末尾がテァまたはテ（ー）のように発音されていることから、ゴッタに何らかの形式が付いて変化した可能性が考えられる。語例：アガッタゴッテ（緊張しただろう／緊張したようだ）、ワルイゴッテ（悪いだろう／悪いようだ）、イーゴッテ（良いだろう／良いだろうね）、オガシーゴッテ（おかしいだろう／おかしいようだ）など。動詞の例もあるとみられる。

2.2 調査例文と調査方法

調査例文は、方言文法研究会（現在進行中のJSPS 科研 20H00015による組織）の研究分担者である高木千恵氏・船木礼子氏・松丸真大氏による調査票を抜粋して利用した。この調査票は、全国諸方言の推量形式を把握するために作成されつつある試案である。本論の調査は、述語への接続、形態変化、共起する副詞、バリエーション（他のムード形式との共起関係・従属節への共起・推量に隣接する意味・用法）を確認した。

調査方法について、調査の最初にどのような形式を使うかを話者に尋ね、その場で紙に書き出した。書きだした語形を調査例文にあてはめながら、話者に実際に発音してもらって、使用の有無や意味などを確認した。

調査で得られた語形はベ類、ベオン類、ゴッテ類、その他のドモー／ンデネーガ／ガモシネーなどであった。これらは基本的に用言の終止形に後接するが、形容動詞（「静かだ」など）＋ゴッテ類のみ連体形相当に付く。これらの形式には、末尾に丁寧表現のネスが付くことがあり、仙台などで用いられるスを話者に確認したところ、使わないとのことであった。なお、前述の談話資料で確認されたイ類は、ほとんど確認できなかったため省略する。

なお、ベ類／ベオン類／ゴッテ類ともに、発話現場に存在しない出来事で、話し手が直接見聞きしていない出来事、話し手の知識や経験に基づいて想像した出来事を表すという点で、共通している。以下、それぞれの特徴について概略を述べる。

3 形式の種類と意味

3.1 ベ類

3.1.1 形式

ベ単独と、前後に他の形式が付いた次のような形式がある。ベは、終止形がルで終わる動詞に後接して直前の音が促音化した場合、ペで発音される場合がある。

ベ {ネ (一) / ナ (一)}、ペ {ネ (一) / ナ (一)} : 直前の音が促音化した場合

ベガ (ガー / ガナ) : 疑問

デネベガ {一 / ネ (一) / ナ (一)} : 否定疑問

ベ (ネス) : 丁寧

スペ (一) : 丁寧

ベス : 勧誘

この他に、条件表現の接続助詞由来のタラが付いたベンタラが確認された。この形式は句末や文末で用いられ、岩手県旧伊達藩地域で話し手の認識を表す表現や感嘆表現などに用いられており、宮城県沿岸北部に位置する気仙沼市方言に連続的に分布していると考えられる。

3.1.2 用法

ベ単独で用いる場合、出来事の生起を押し量りつつも、話し手が確実に起きるあるいは過去に確実に起きたと思っている出来事を表す。また、話者によると、ベ単独で用いると、推量表現よりも意志表現の意味で取りやすくなるという。

ベを単独で用いると、聞き手に対して話し手が「そういうことなのだ (と私は思っている)」と伝えることになる。ややきつい表現に感じられるため、ネやナなどを後接、あるいはデネベガ (一) など否定疑問の形を取るなど、他の形式と組み合わせることで、断定的で押しつけるような物言いを避けるのが一般的である。また、意味やニュアンスをほとんど変更せずに「と思う」由来のドモ一 (ヨ) と置き換えが可能である。

(1) [友だちから「あの人は今日役場に行くだろうか」と聞かれ、迷いながら] たぶん行グベネ / 行グベナ / 行グドモ一ヨ / 行グデネベガー。

(2) あそこは、車が通らないので、たぶん静ガダベナー / 静ガダドモ一ヨ / 静ガデネベガネ一。

後述のベオン類やゴッテ類と同様、ハズダと置き換えが可能な場合がある。ただし、出来事の生起の確実性について、ハズダが非常に強いのにに対して、ベ類はやや弱い。

(3) 彼は私より2つ下だから、今年で30歳にナルハズダ / ナルベ。

勧誘表現は、ベ単独ではなく、イグベスなどのベスが使われやすい。ベスのスは、仙台などで用いられる丁寧表現のスではなく、べから切り離すことができない。勧誘表現専用の形式として用い

られており、岩手県と連続的である。動詞「行く」に関しては、ヤベ／アベなどの形（歩む+ベに由来する形）が用いられる。

（4）今度ご飯でも食べにイグベス／ヤベ。

命令表現には、ベ類ではなく命令形が用いられる。

（5）〔子どもに〕トイレぐらい一人でイゲ。

3.2 ベオン類

3.2.1 形式

ベに終助詞モノが付いたベモノと、それが変化した形がある。終止形がルで終わる動詞に後接した際に直前の音が促音化した場合、ペモノ／ペオンなどのように発音される場合がある。なお、末尾に終助詞ネ（一）／ナ（一）が後接することがある。

ベモノ／ベオン／ベオン、ペモノ／ペオン／ペオン：直前の音が促音化した場合

一人の話者が複数の発音で使用しており、ベにモノが付いた形であるという語源意識が明瞭である。単独のモノ／オンも生産的に使われている。今回の調査では、さらに変化の進んだビオン／ピオン（青森・秋田で使われている）や、ベオ（岩手県旧南部藩地域）のような形を話者に提示すると、使わないという回答が得られたが、実際に例文として発音してもらうと、ビオンについては近い発音になる場合がある。

3.2.2 用法

ベオン類は、単独のベ類がやや断定的であるのに対して、話し手自身がその出来事の生起について「私はそう思っている／認識している」という意味になる。ベ類は、直前に直接見聞きした出来事などを根拠とすることができるが、ベオン類はその場合では使用しにくく、話し手の認識に偏っている。また、副詞タブンとは共起しない。

（6）〔友だちから「あの人は今日役場に行くだろうか」と聞かれ、迷いながら〕

行グベモノ／行グベオン。

後述のゴッテ類と同様、ハズダと置き換えが可能な場合がある。ただし、ハズダが確定的な意味合いが強いのに対して、ベオン類は話し手の主観を述べる表現になる。

（7）彼は私より2つ下だから、今年で30歳にナルハズダ／ナルベモノ／ナルベオン。

3.3 ゴッテ類

3.3.1 形式

ゴッテ類はコト+ダに由来すると考えられるが、前後に分割できるというような語源意識は確認されない。発音は、ゴッテアのように末尾の母音が広いエのようになるか、ゴッテーのように長音（または半長音）になることが多い。終止形がルで終わる動詞に後接した際に直前の音が促音化した場合、コッテア／コッテーなどのように発音される。また、連体用法をもたない。確認できた語

形は次の通りである。

ゴツテァ／ゴツテェ (ネー／ネァ／ネス)、コツテァ／コツテェ：直前の音が促音化した場合
ゴツタベ (一) /ゴツタイ
ゴツテァガモ

このうち、ゴツタベ (一) /ゴツタイと、ゴツテァガモ (シレネー) を回答した話者は一名で、気仙沼市内での地域差の可能性があり、今後さらなる確認が必要である。

他に、コト+ダに由来すると考えられるものとして文末のゴダ (一) があり、ゴツテ類とは明確に区別されて使われている。ゴダ (一) は、眼前の出来事について、感嘆したり、話者の体験を述べたりする場合に用いられる。ただし、〔60 代女性〕は使用しないとのことで、年代差や地域差がある可能性がある。

(8) [よく食べる人を見て] なんとよく食べッゴダー。

3.3.2 用法

ゴツテ類は、話し手の中で推定した出来事を表す。推定の根拠は、自分の知識、直前の状況、当然の結果などで、これらの根拠が単独または複数でも使うことができる。発話時現在に生起中である推定される出来事や、すでに終了した出来事には使いやすいのに対して、これから起きる出来事には使いにくい傾向がある。聞き手に対して、話し手が「私はそういうことだと思よ」と伝える表現になる。話者の内省では、ベ類に比べると、より確実な出来事を表す。

(9) [友だちから「あの人は今日役場に行くだろうか」と聞かれ、迷いながら]
たぶん行グゴツテァ / 行グゴツテェ。

(10) [あの人は夜8時には] たぶん寝ッゴツテァ / 寝ッゴツテェ。

ハズダと置き換えが可能になる場合もある。ベオン類と同様、ハズダが確定的な表現であるのに対して、ゴツテ類は話し手の主観的な表現になる。

(11) 彼は私より2つ下だから、今年で30歳にナルハズダ / ナッゴツテェ。

3.4 その他の形式と用法

他の形式は、次のようなものが得られた。これらの形式は、上記のベ類／ベオン類／ゴツテ類とは共起しない。

ドモー：と思う

(ン) デネー (ガ／ノ)：(の) でない (か／の)

ガモシネー (ネ)：かもしれない (ね)

細かいニュアンスはそれぞれ異なるが、いずれも推量表現かそれに近い表現に用いることができる。前述のように、ドモーは、意味やニュアンスをほとんど変更せずにベ類と置き換え可能である。

(ン) デネー (ガ／ノ) とガモシネーは、ドモーに比べて、出来事の生起に関わる根拠がややあいまいで、確実性が落ちることを含意することになる。

(12) [友だちから「あの人は今日役場に行くだろうか」と聞かれ、迷いながら]

行グドモーヨ／行グンデネーノ／行グガモシネーネ。

(13) [友だちから「あの人は今日役場に行っただろうか」と聞かれ、迷いながら]

行ッタドモー／行ッタンデネーノ／行ッタガモシネーネ。

4. 今後の課題

以上、気仙沼市方言における推量表現とその周辺に用いられる形式について、主に、用いられる形式の種類、接続、共起関係について確認した。ただし、意味やニュアンスなどの違いや使い分けについては、今回の調査では詳細には確認できていないため、今後の調査でさらに確認することになる。

特に、ゴツテ類については、様態表現との関係を調査する必要がある。過去の東北地方の調査報告を確認すると、当初は様態表現に用いられていたものが、地域によって時期は異なるが、推量表現へと使用範囲を広げていったように思われる。本稿では触れなかったが、気仙沼市方言の談話資料におけるゴツテ類は、様態表現、あるいは様態表現とも推量表現とも判別が難しい表現に用いられることがある（竹田晃子 2019）。今後は、意味用法を明らかにしたいと考える。

注

1 2012年から2016年の5年間、東北大学方言研究センターが収録した談話資料（東北大学方言研究センター編（2019）『生活を伝える方言会話 [資料編・分析編] 一宮城県気仙沼市・名取市方言一』ひつじ書房）で、収録当時71歳から75歳の男女による場面会話と自由談話が収録されている。

文 献

- 大西拓一郎編（2016）『新日本言語地図—分布図で見渡す方言の世界—』朝倉書店
- 国立国語研究所（1994）『方言文法全国地図 第3集（活用編2）』財務省印刷局
- 国立国語研究所（2002）『方言文法全国地図 第5集（表現法編2）』財務省印刷局
- 高田群司（2011）「岩手県遠野方言の推量表現—形式名詞の文法化に注目して—」『日本語文法』11・2
- 竹田晃子（2019）「推量・意志・勧誘・命令表現の形式」東北大学方言研究センター編『生活を伝える方言会話 [資料編・分析編] 一宮城県気仙沼市・名取市方言一』ひつじ書房
- 船木礼子（2006）「推量表現」大西拓一郎編『方言文法調査ガイドブック 2』科学研究費基盤研究(B)「方言における文法形式の成立と変化の過程に関する研究」（2002-2005年度、課題番号14310196）、<https://www2.ninjal.ac.jp/takoni/DGG/DGG2.pdf> [2024/1/4 閲覧]
- 船木礼子（2017）「推量表現形式の分布とその変化—地域共通形式への収斂と脱推量形式化—」大西拓一郎編『空間と時間の中の方言—ことばの変化は方言地図にどう現れるか—』朝倉書店

語彙

半沢 康

1 調査の目的

2023年度気仙沼調査の語彙項目は、以下のふたつの目的をふまえて設定した。

- 1.気仙沼市・三陸地方南部地域調査の追跡
- 2.宮城県周辺地域グロットグラム調査との比較

1の調査は2005年から2007年にかけて東北大学国語学研究室が実施したものである。2006年には気仙沼市内で多人数調査が行われ、さらに2007年には調査範囲を広げ、気仙沼市を含む三陸地方南部地域(宮城・岩手県境域)の方言分布の様相が把握された¹。今回、それらの調査で設定された語彙項目の一部を再度取り上げて調査し、前回調査から約15年後の実時間変化をとらえることを企図した。

2のグロットグラム調査は、1990年代末以降、宮城県とその周辺地域で実施されてきた以下の調査である。東北大学国語学研究室によって企画された調査(下記●印)と個人企画のものとの2種類がある²。各調査地域の位置等は後掲図1を参照。

- 中新田グロットグラム(1997年実施, 加藤正信・遠藤仁編 1998)³
常磐線グロットグラム(1996-1998年実施, 加藤正信他編 2004)
- 仙石線グロットグラム(2002年実施, 小林隆編 2003)
阿武隈急行グロットグラム(2003年実施, 半沢康・武田拓 2005)
七ヶ宿グロットグラム(2005年実施, 武田拓・半沢康 2005)
- 陸羽東線グロットグラム(2010年実施, 小林隆編 2011)

これらグロットグラム調査の語彙項目からも一部を選定し、宮城県内各地と気仙沼市の状況が比較できるようにした。LAJ等の項目に取り上げられておらず、県内の分布が十分明らかでない項目を優先して選んだ。

2023年度の調査は高年層女性2名のみを対象としたものであり、準備的、予備的な調査と位置付けられる。15年間の経年比較、県内他地域との詳細な比較検討は、今後予定されている気仙沼市内多人数調査や周辺地域分布調査を待ってあらためて実施する。本稿ではそれら分析に先駆けて、今年度の調査結果について報告する。

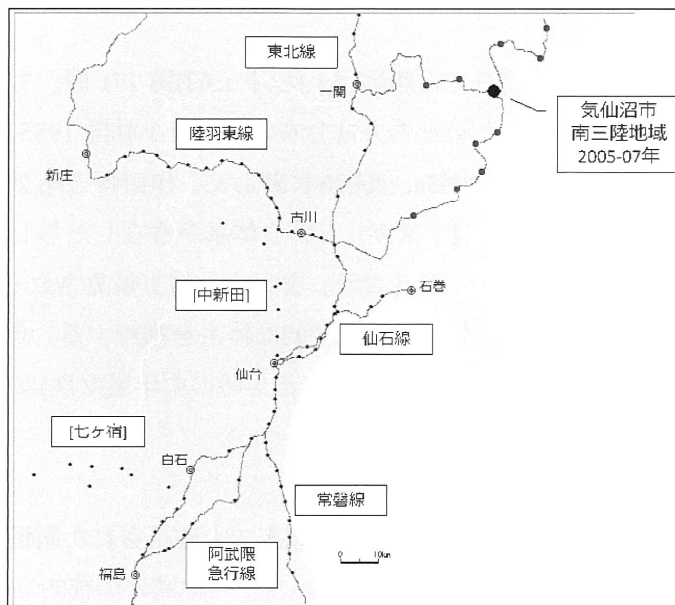


図1 宮城県内および周辺地域のグロットグラム調査地点

2 インフォーマント

2023年度の語彙調査にご協力いただいたのは表1に示す2名の方である(匿名で表記)。ほぼ同世代であるが、出身地は相応の距離がある。特に話者Bは平成大合併以前には気仙沼市と異なる自治体であった旧本吉郡唐桑町のご出身であり、おふたりの回答の異なりにそうした地域差が反映した可能性も残る⁴。先行調査との比較はこの点にも留意して行う。

表1 インフォーマント

	生年	調査時年齢	性別	居住歴
話者A	1949年	74歳	女性	0歳～30歳:気仙沼市波路上, 30歳～現在:気仙沼市滝の入
話者B	1952年	70歳	女性	0歳～26歳:気仙沼市唐桑町(旧本吉郡唐桑町), 26歳～現在:気仙沼市古町

3 追跡調査項目

本節では約15年前に実施された「1.気仙沼市・三陸地方南部地域調査の追跡」項目の結果について報告する。今回の調査結果は表2に示した⁵。下記の項目(1)(2)は作田将三郎 2012 が、(3)については榎引祐希子 2012 がそれぞれ先行調査の結果を報告している。

表2 2023年度調査結果_追跡調査項目

	113. 杵殻	114. 糠	119. 唾	120. 痰	133-1. イキナリ [形容詞]	133-2. イキナリ [動詞]
話者A	モミガラ	ヌガ #サクズ コメヌガ	ツバ ナツペ	タツペ #タンペ	聞かない	聞かない
話者B	モミガラ	ヌガ #サクズ	ツバ ネツペ	タンペ	聞かない <アツタゲと 言う>	聞かない

(1) 粃殻と糠

「粃殻」と「糠」については、『日本言語地図』(以下 LAJ)第 171 図、172 図にて全国の方言分布が示され、また「農書」を資料とした近世の方言分布の様相が小林隆 1985 によって明らかにされている。宮城県内の語史は作田将三郎 2003a, 2003b に詳しく、作田将三郎 2003b によれば、宮城県域では近世期に広く、「糠：サクズ、粃殻：ヌカ」という体系が成立したらしい。一方、気仙沼市を含む沿岸各地には、「糠：サクズ、粃殻：モミガラ」という地域も散見される(LAJ 第 171, 172 図)。

表 2 に示すように、今回の話者 2 名もこの伝統的な体系を維持する。作田将三郎 2012 に掲載された調査結果の集計表でも、今回の話者世代(2006 年当時の中年層女性)にこの体系が一定確認されている。

(2) 唾と痰

「唾」の俚言形ネッペ、ナッペはともに 2006 年調査でも確認された語形である。LAJ 第 118 図によればネッペは宮城県沿岸北部を中心に分布しており、当地域の伝統的方言形とみられる。一方、ナッペは LAJ 第 118 図には少ないものの、仙石線グロットグラムでは石巻市周辺の比較的若い世代に認められる語形である(作田将三郎 2003a)。

LAJ 第 118 図では宮城県内に「唾」を意味するタンペが広く分布するが、今回タンペはいずれも「痰」の俚言形として回答された。加藤正信他 1982 掲載の言語地図をみると、宮城県北地域には「唾」のタンペと「痰」のタンペが混在するものの、両者はほぼ混用されることなく相補分布をなしている。仙台付近から「唾」の意味のタンペが伝播し、同音衝突の発生を回避した結果、「痰」の意味のタンペが周辺へと追いやられた可能性が指摘されている。今回の結果もこれらの指摘とは矛盾しないものとなっている。作田将三郎 2003a でも、石巻市、旧鳴瀬町など沿岸部に「唾：ネッペ・ナッペ、痰：タンペ」という回答が認められ、県沿岸部に広く分布しているものかもしれない。ただし 15 年前の気仙沼市調査では、タンペを「痰」の意味で用いるインフォーマントは必ずしも多数派ではない。作田将三郎 2012 の報告ではインフォーマント個々人の使い分けの状況(同音衝突を回避しているかどうか)が判然としないため、あらためてデータ整理を行い、次年度以降の多人数調査の結果と比較を行いたい。

その他「唾」を意味する語形について、作田将三郎 2012 ではスタンペがほとんど回答されないことから、ナッペとともに「廃語になりつつある、あるいは廃語化している」と解釈されている。

スタンペは、LAJ 第 118 図では宮城・岩手県境にみられ、また県南部のグロットグラム調査や武田拓編 2015 でもスタンペ(またはシタンペ)が確認される。作田将三郎 2003a によれば白石市や丸森町の資料にも記載されているという。このことから作田将三郎 2003a は、かつて宮城県内に広くスタンペが分布し(その後衰退して南北に残った)とみなしている。

しかしながら作田将三郎 2003a も指摘するとおり、おそらくスタンペ(シタンペ)はスタキ(シタキ)とタンペの混淆形なので、2 語が接触する地域であれば、遠隔地でそれぞれ独立に発生することは十分に考えられる。LAJ 第 118 図では、宮城県南部にこの混淆形が確認されない⁶ことをふまえると、県南部のスタンペ(シタンペ)は比較的近年に広まったものと目される。とすれば、南北のスタン

ぺ(シタンペ)を同じ古形の残存と考えることは難しくなるだろう。混淆によって生じた新形が、それ以前に存在した本来形より先に衰退するという点にもやや不自然さが残る。

以上より作田将三郎 2003a の「スタンプがかつて宮城県内に広く分布した」という推測は再検討が必要となる。今回の調査でもスタンプは確認されないが、作田将三郎 2012 のいうように「廃語化」したのではなく、もともと気仙沼市周辺では混淆形が生じなかったものかもしれない。

(3) イキナリの程度副詞用法

宮城県におけるイキナリの程度副詞用法は、1990年代から着目されるようになり、佐藤祐希子 2003 によって仙台市の使用実態の詳細が明らかにされている。現在はこの程度副詞用法が地域特有のものであることが広く知られるようになった。宮城県では各種商標や方言メッセージにも活用され、さながら伝統的な方言形であるかの扱いである。

櫛引祐希子 2012 は、このイキナリの用法について、三陸地方南部地域の分布状況を示している。高年層、若年層ともに使用が盛んではなく、この結果を受けて「東北最大の都市である仙台が南三陸において強い社会的威光を持った地域とは言い難い」と述べる。

今回の調査でもイキナリの程度副詞用法は確認されず、これは櫛引祐希子 2012 では調査されていない動詞修飾用法についても同様であった。一方、話者 B からは対応する程度副詞としてアツタゲが得られた。おそらくは「あるだけ」に由来するもので、秋田県の新しい程度副詞シッタゲ、シクタゲ(死ぬだけ)と類似の変化過程を経て生じたと思しき形式である。南三陸南部地域出身の学生からもこの程度副詞の存在について教示を受けたことがあり、当該地域で独自に発生し、広がった可能性がある。あるいはこの形式がすでに存在していたために、イキナリの程度副詞用法を受容する必要がなく、気仙沼市周辺に伝播が及ばなかったということも考えられる。

ただし 15 年前の調査では、イキナリの程度副詞用法が多人数調査項目に含まれていないため、そもそも気仙沼市内に程度副詞としてのイキナリがどの程度普及しているのか、実際のところは判然としない。

気仙沼市内のイキナリの現状については、次年度以降の多人数調査の結果を待ちたい。

4 グロットグラム項目

4 節では宮城県内および周辺地域で実施されたグロットグラム調査項目の結果を述べる。

各地のグロットグラム調査では、それぞれの対象地域に応じて調査項目を決めているが、共通する項目も多い。仙台市周辺や県南部、仙北の内陸部のグロットグラムデータと今回の調査結果を比較し、気仙沼市と県内他地域との異同を確認する。

(1) 小動物の意味分節

身の回りの小動物は子どもの興味の対象であり、方言量が豊富であることが知られる。他方、その意味分節にも地域差が認められる。ここでは形状がよく似た生物「蝶」と「蛾」、「いなご」と「ばった」の結果を報告する。調査結果は表 3 に示す。

表3 2023年度調査結果_グロットグラム項目(小動物名)

	101.蝶	102.蛾	105.いなご	106.ばった
話者A	チョーチョ #チョマコ<小 さいもの>	ガ #チョマコ<小 さいもの>	エナコ° ハッタキ°	コーロキ°
話者B	テビラッコ	テビラッコ	イナコ° #ハッタキ°	バッタ #ハッタキ°

①「蝶」と「蛾」

加藤正信他 1991 は、宮城・岩手県境付近における「蝶」と「蛾」の俚言分布について報告している。気仙沼市の北部、岩手県大船渡市、旧三陸町(現大船渡市)、釜石市付近には、「蝶：テビラ、蛾：ガ」という体系が分布し、一部に「蝶」と「蛾」の俚言が逆転する地域がある。加藤正信他 1991 はこの分布を「かつては蝶も蛾も区別せずにテビラ等と呼んでいたのが、共通語形チョー、ガのいずれか一方、または両方を各地点でばらばらに取り入れた」結果と解する。

図2に宮城県内各地のグロットグラムの結果を示す。おおよそ1950年代以前生まれの世代に俚言形チョーマ(内陸北部ではチョーマン)がみられ、多くは「蝶」を意味するものとして回答される。ただしチョーマンの分布域には、「蝶」と「蛾」を区別しない話者や、「蛾」をチョーマンと呼ぶ話者が確認され、加藤正信他 1991 に示される岩手県南部の状況と共通する。南部の岩沼市にも1名、「蝶」と「蛾」をともにチョーマとする話者がみられる。

これらの結果から、加藤正信他 1991 が述べるように、旧伊達藩領域では本来「蝶」と「蛾」は同種の生物とみなされ、区別されずに呼称されていた可能性が高い。今回の調査でも、この地域で両者が区別されていなかったことを示唆する結果が得られた。話者AとBの使用語が異なるのは旧気仙沼市と旧唐桑町の地域差の反映とも考えられる。

②「いなご」と「ばった」

東北地方における両者の方言分布に関しては真田信治 1973 の分析がよく知られる。真田信治 1973 は戦前に実施された小林好日による通信調査資料(「小林資料」)を用いて東北地方の「いなご」「ばった」の方言地図を描き、言語史を考察した。

真田信治 1973 によれば、東北地方にはおおよそ4種類の型が存在し、「いなご」と「ばった」を区別せずにハッタギと呼ぶ最古のタイプAから、両者を区別するB、Cが生じ、共通語と同じ東北南部のタイプD⁷へ移行したとする。宮城県内にはA、B、Dの3タイプが認められるが、これは1990年代後期に行われたグロットグラム調査の高年層世代データでも再現される(図3)。

仙北の内陸部では「いなご：ハッタギ、ばった：トランボ」と両者を区別するBタイプが高年層に残り、仙台以南ではDタイプが主流となる。亶理地方の高年層にナゴが確認されるのも真田信治 1973 の結果に合致する。おおよそ小林好日の調査が行われた1930年代(戦前)生まれ世代に伝統的な俚言形、方言体系が残り、戦後生まれ世代からその崩壊が始まっている。これは山形県庄内地方の『庄内浜荻』語彙残存調査でも確認された傾向である(半沢康 2021)。

真田信治 1973 では、気仙沼市周辺は最古のタイプ A の地域に分類され、もともと「いなご」と「ばった」を区別しなかった。話者 B もかつては両者を区別せずにハッタギと呼んだとのことである。調査中の談話によれば、生育した唐桑半島の地域には水田があまり存在せず、いなごも食用とはしなかったという。一方、気仙沼市内で生育した話者 A は学童期に「ハッタギ取りをして学校へ納めた」という経験があり、「ばった」をハッタギと呼ぶことはなかったと回答された。

おふたりの話者の認識の違いは、おそらくこうした幼少時の経験に由来するのであろう。小動物の区別の有無は生育環境や自然との接触、生き物への関心などによっても当然影響を受け、現代では多分に個人差が生じていることが想定される。そもそも外形上も習性もよく似た「いなご」と「ばった」を区別する体系が生じたのは、真田信治 1973 も指摘するように、「いなご」が稲の害虫で(かつタンパク源でも)あるという、稲作において特に重要な昆虫であったことが影響したためと考えられる。稲作に携わる経験が乏しい地域では、バッタ類全般と「いなご」とを区別する必要性が低く、両者の違いを習得する人が少なかったものと推察される。

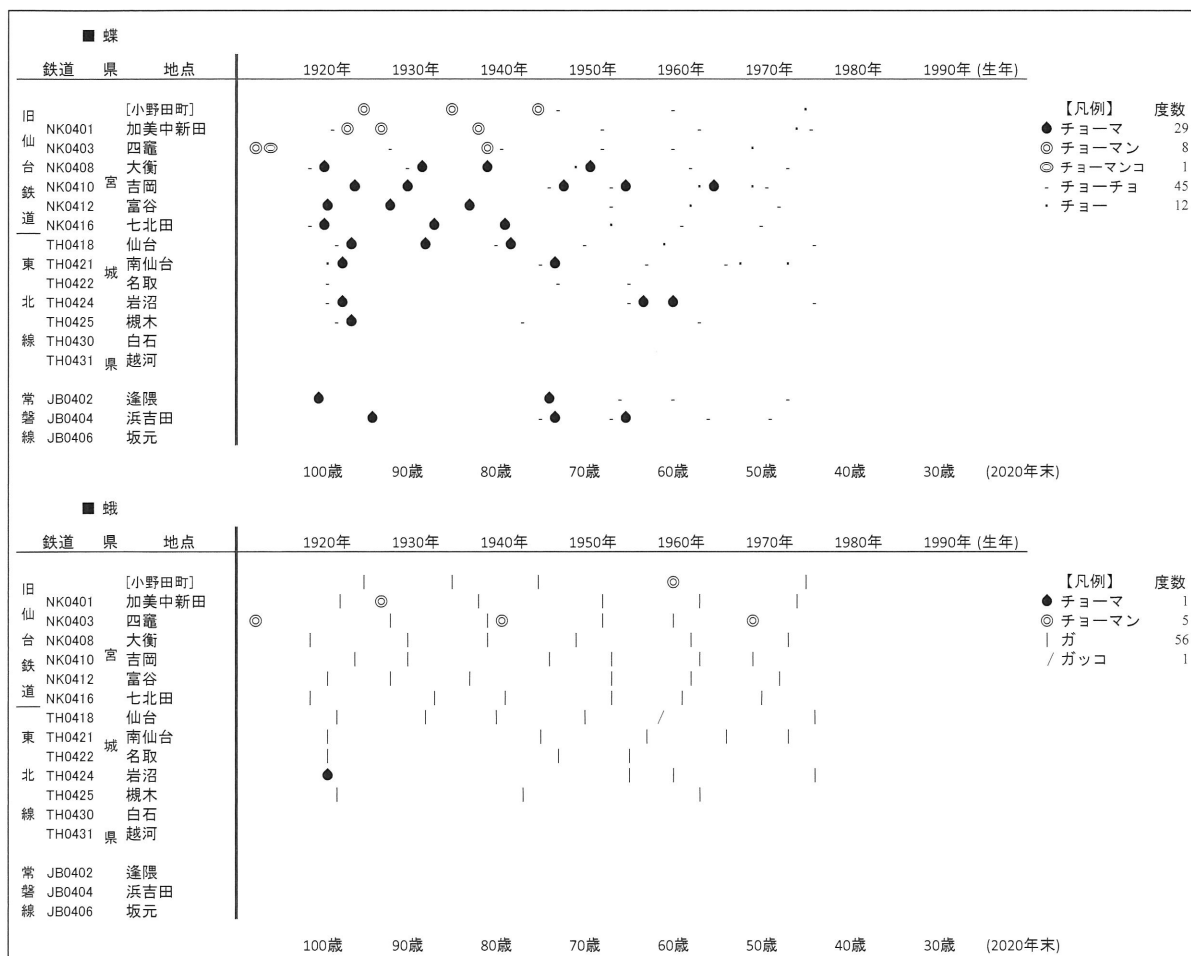


図2 「蝶・蛾」俚言形分布の地域差・世代差(宮城県内グロットグラム)

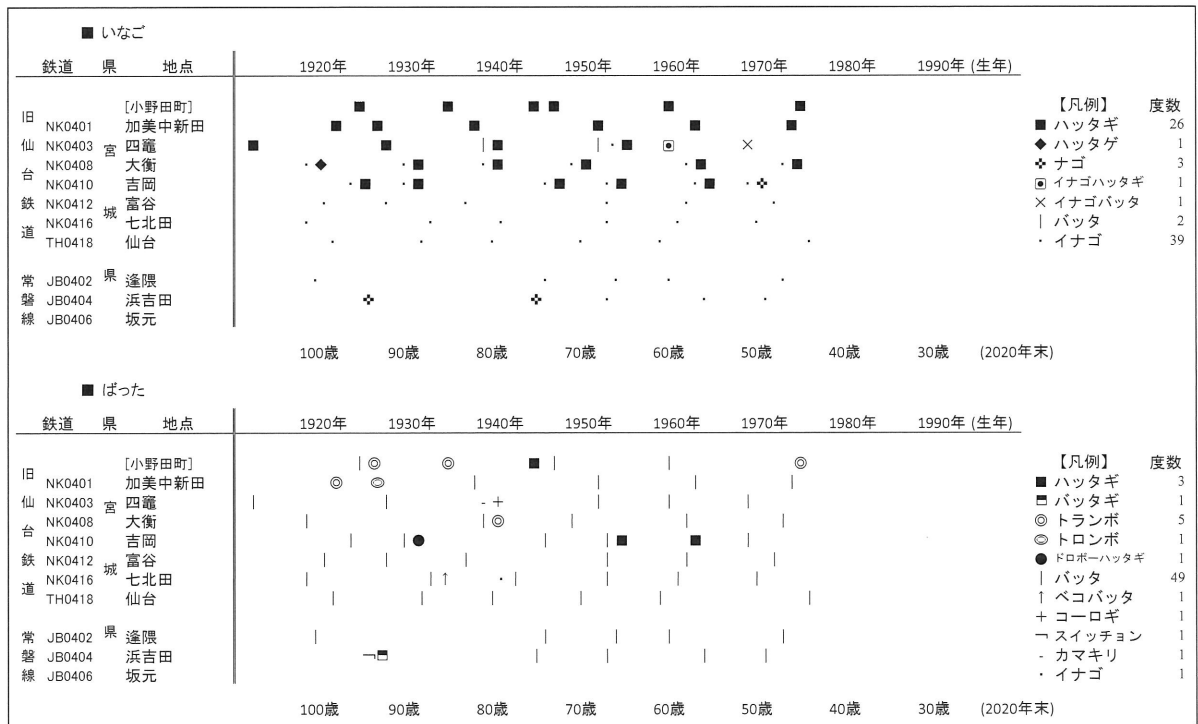


図3 「いなご・ぼった」俚言形分布の地域差・世代差(宮城県内グロットグラム)

(2) 遊びのことばの地域差

子どもの遊びに関することばもまた多様な地域性を示す。主たる使用者である子どもは交流範囲に制約があり、新語が生じても狭域の伝播にとどまる傾向がみられるという(山田敏弘 2023)。

以下、宮城県に特徴的な子どもの遊びことばについての調査結果をいくつか紹介する。

表4 2023年度調査結果_グロットグラム項目(遊びのことば)

	124.ページワンのかけ声	126.だるまさんがころんだ	127.数え方のフレーズ
話者A	アガリ #ノーサイ	ダルマサンガコロンダ	(ニジューカケロ)
話者B	#ノーサイ	ダルマサンコロンダ <数え方の便法としても使用>	ニジューカケロ

① ページワンのかけ声

トランプ遊び「ページワン」で、最後の手札を場に出す際に「ノーサイ」と発しなければならぬというローカルルールが宮城県を中心に、東北南部にみられる。このかけ声は、仙台市付近では「ノームサイ」へ変化し⁸、斜めの等語線を描いて周辺へ広がる様子がグロットグラムより確認される(図4)。2音節目の子音、母音の交替、(おそらくは民衆語源にもとづく)末尾音節の付加(-サイド、-サイト、-サイン)など、さまざまな変異形が各地に存在するのは、いかにも口承による子どもの遊びことばらしい。今回、気仙沼市にはノーサイのみが確認された。現在の高年層世代には仙台

からの伝播が及んでいなかったものと考えられる。

②クルマノトンテンカン

一般に「だるまさんがころんだ」として知られる遊びを仙台市付近ではクルマノトンテンカンと呼んだ。一部地域に回答がみられるように、もともとは「10を速く数える場合の便法」のフレーズとしてさまざまな遊びの中で用いられていたものが、その後特定の遊びの名前に転じたようである(加藤・遠藤編 1998)。

石巻市周辺や大衡村以北ではほぼ使用されておらず、このフレーズ自体が仙台以南の地域に分布していたものだった可能性が高い。県最北部の気仙沼市にも確認されなかった。図5をみると、仙台市から離れた伊具郡や七ヶ宿町に「数え方の便法」という回答が多いことから、おおよそ仙台市周辺から遊びの名称としての使用が広まったものと目される。

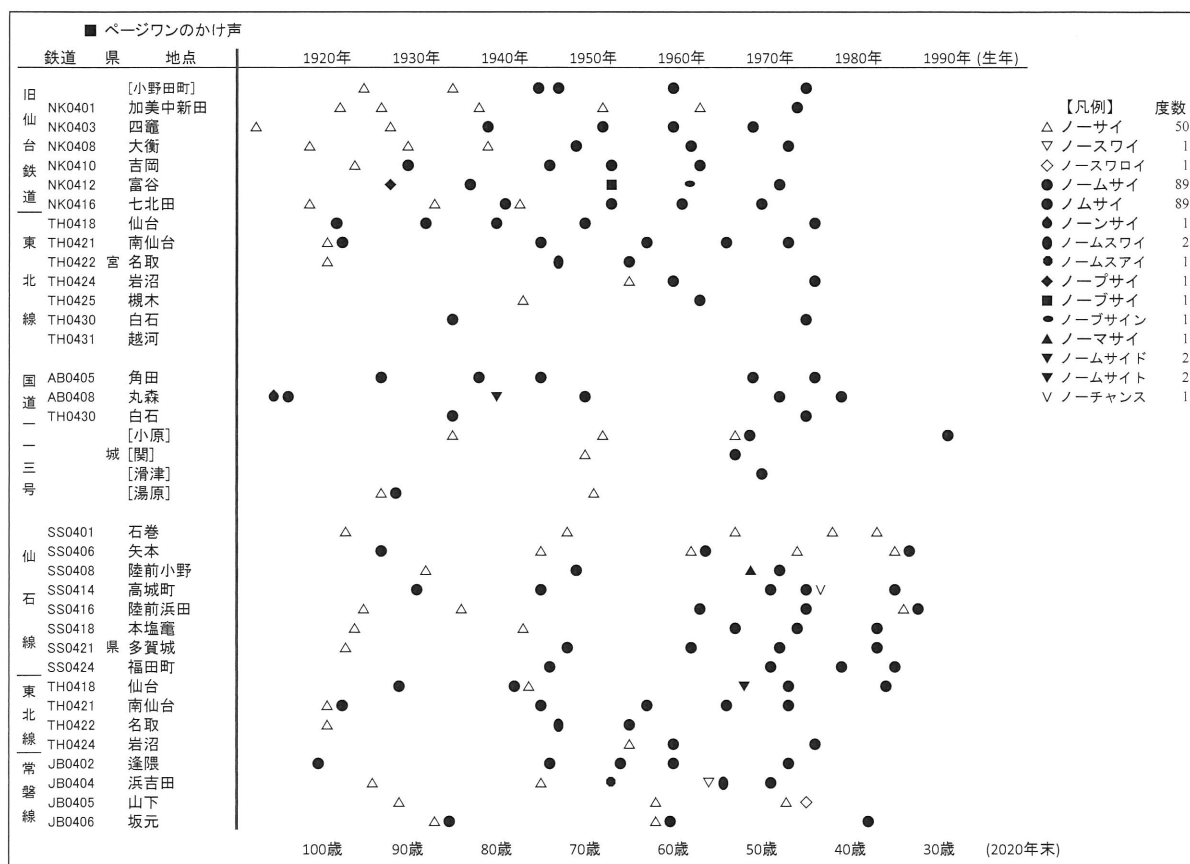


図4 「ページワンのかけ声」の地域差・世代差(宮城県内グロットグラム)

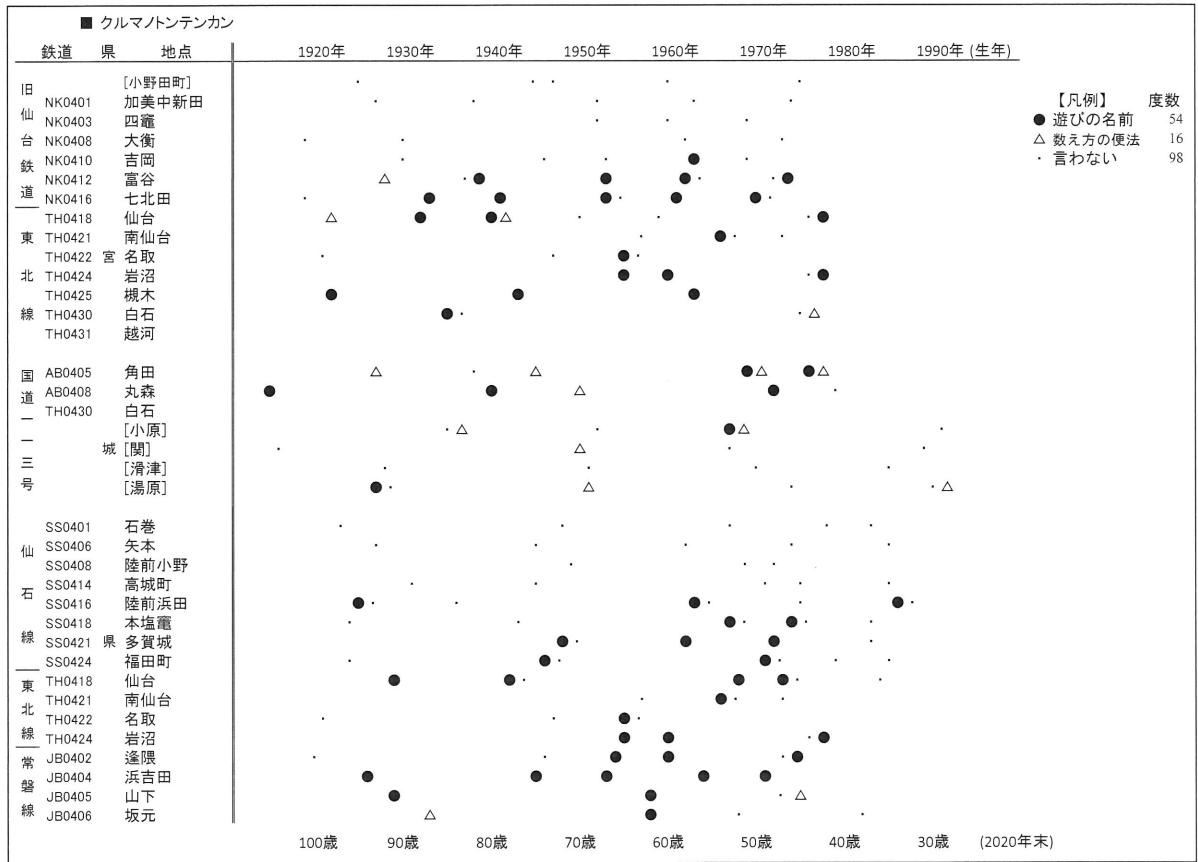


図5 「クルマノトンテンカン」使用の地域差・世代差(宮城県内グロットグラム)

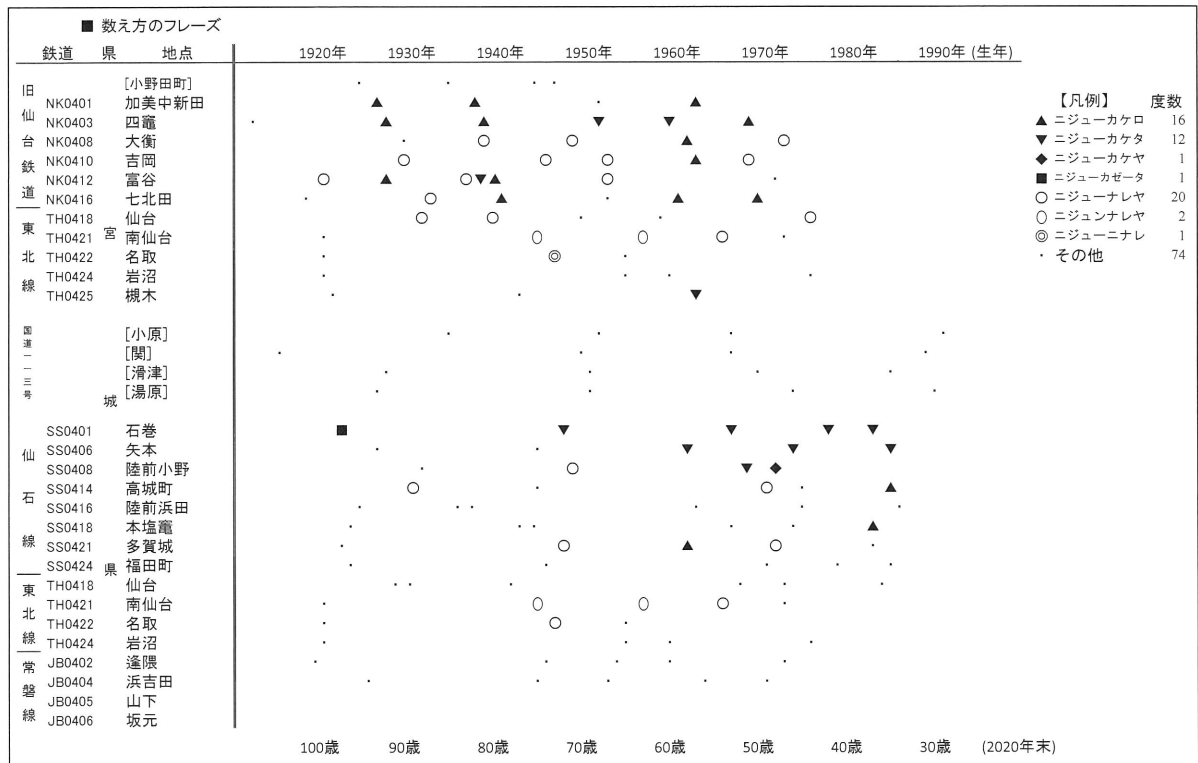


図6 「数え方のフレーズ」の地域差・世代差(宮城県内グロットグラム)

③数え方のフレーズ

ものをふたつずつ数える際に唱える「ニーシーローヤートー」の続きの言い方は県内に地域差がみられる。おおよそ県北部にはニジューカケロ類、仙台市の周辺にニジューナレヤ類が分布し、南部には特定のフレーズが存在しない(図 6)。1920 年代生まれ世代に使用が少ないことから、加藤・遠藤編 1998 では「比較的新しく発生したもの」と推測されている。気仙沼市でも県北部に共通する形式が確認された。

4 まとめ

以上、2023 年度気仙沼調査の語彙項目の結果の一部について報告した。既述のとおり、今年度の調査は準備調査として位置付けられる。他の項目も含めた分析を行い、今後、多人数調査や周辺地域分布調査に取り上げる項目検討を進めたい。

注

- 1 一部地点では高年層と若年層 2 世代の調査がなされている。
- 2 このほか 2000 年から 2002 年にかけて、福島駅以北の東北線、津軽線、函館線沿線でも広域のグロットグラム調査が実施されている(井上史雄他編 2003)。
- 3 調査地点がおおむね旧仙台鉄道沿線にあたるので(小林眞勝他 1991)、本稿のグロットグラム図ではこの鉄道名を使用し、調査地点も旧駅名を示している。
- 4 約 15 年前に実施された東北大学国語学研究室による「1.気仙沼市・三陸地方南部地域調査」でも、唐桑町は気仙沼市とは別の自治体として扱われ、分布調査の対象地点となっている。
- 5 以下表中には、インフォーマントの回答を原則片仮名で表記する。複数回答があった場合は上から発話順に並べる。#は誘導による回答、()は理解語であることを示す。<>中は話者のコメント、注記である。鼻濁音はカ行に半濁点を付して表す。イエについては聞こえの近い音で表記した。中舌母音は特に示さず、カタ行の有声化は表記に反映させた。
- 6 作田将三郎 2012 によれば「小林資料」でもスタンペはほとんど確認されないという。
- 7 ただしタイプ D の地域が一様に共通語と同じイナゴ/バッタを用いるわけではなく、一部地域には俚言形がみられる。たとえば宮城県亶理地方から福島県浜通り中北部の地域と、山形県村山地方には「いなご」の俚言形ナゴがまとまって分布する。
- 8 同様の变化は福島県の南部でも確認されており(加藤正信他編 2004)、ノームサイは仙台市周辺以外の地域でも独立に発生したようである。その理由はよくわからない。

文 献

- 井上史雄・玉井宏児・鍵水兼貴編(2003)『東北・北海道方言の地理的・年齢的分布(TH グロットグラム)』科研費報告書
- 加藤正信・佐藤和之・小林隆(1982)「宮城県北地方の方言調査報告」『日本文化研究所研究報告 別巻』19(井上史雄・篠崎晃一・小林隆・大西拓一郎編(1994)『日本列島方言叢書 3 東北方言考②』ゆまに書房に再録)
- 加藤正信・村上雅孝・神戸和昭・齋藤孝滋・武田拓・半沢康(1991)「南部・伊達藩境地帯における方言分布調査の報告と考察」『日本文化研究所研究報告 別巻』28

- 加藤正信・遠藤仁編(1998)『宮城県中新田町方言の研究』科研費報告書
- 加藤正信・大橋純一・武田拓・半沢康編(2004)『東北・関東境界域言語地図 | 常磐線・磐越東線グロットグラム』科研費報告書
- 榎引祐希子(2012)「方言特有の「イキナリ」「ナゲル」「オチル」の分布状況」小林隆編『宮城県・岩手県三陸地方南部地域方言の研究』東北大学国語学研究室
- 小林隆(1985)「農書からみた近世の方言分布―<糠>と<粃殻>を例に―」『国語学』140
- 小林隆編(2003)『宮城県石巻市方言の研究』東北大学国語学研究室
- 小林隆編(2011)『宮城県・山形県陸羽東線沿線地域方言の研究』東北大学国語学研究室
- 小林眞勝・徳永幸之・須田瀬(1991)「旧仙台鉄道の歴史的変遷と沿線地域の現況」『土木学会東北支部平成3年度技術研究発表会講演概要集』
- 作田将三郎(2003a)「伝統的方言語彙」小林隆編『宮城県石巻市方言の研究』東北大学国語学研究室
- 作田将三郎(2003b)「宮城県における<糠>の地方語史」『言語科学論集』7
- 作田将三郎(2012)「伝統的方言語彙」小林隆編『宮城県・岩手県三陸地方南部地域方言の研究』東北大学国語学研究室
- 佐藤祐希子(2003)「「気づかない方言」の意味論的考察―仙台市における程度副詞的な「イキナリ」―」『国語学』212
- 真田信治(1973)「東北地方における「いなご」と「ばった」の方言分布とその解釈―故小林好日博士の調査資料を地図化して―」『国語学研究』12(真田信治(1989)『日本語のバリエーション 現代語・歴史・地理』アルクに再録)
- 武田拓・半沢康(2005)「宮城・山形県境地域の方言の実態―セヶ宿街道沿いの調査から―」『仙台電波工業高等専門学校研究紀要』35
- 武田拓編(2015)『宮城県伊具地方方言の実時間調査報告』科研費報告書
- 半沢康(2021)「『庄内浜荻』調査データの多変量解析」『福島大学人間発達文化学類紀要』33
- 半沢康・武田拓(2005)「阿武隈急行グロットグラム調査報告(1)」『福島大学研究年報』1
- 山田敏弘(2023)「言葉遊びと方言地理学―岐阜県・愛知県のチーム分けジャンケンの掛け声を例に―」小林隆・大西拓一郎・篠崎晃一編『方言地理学の視界』勉誠出版

あとがき

本書は、2023年に私が東北大学に着任し、初めて編むことになった調査報告書である。前任者の小林隆氏が11年間に渡って主導してきた、文化庁の委託事業における宮城県のこれまでの記録作業の方針を引き継いで行った調査研究の成果がまとめられている。

小林氏がこれまでに掲げてきた被災地の方言の記録に必要な取り組みは、以下の3点である。

- (1) 日常の言語生活を髣髴と再現するような会話集の作成
- (2) 未開拓な分野、特に、オノマトペ、感動詞、言語行動などの記述
- (3) 広い範囲の方言の状況を把握するための地理的分布の記録

今年度の我々の取り組みも、この指針に沿って行ったもので、以下でその重要性を確認するとともに、今後の発展的な展開と取り組みの意義について私見を述べることで、本書のまとめとしたい。

(1)については、この文化庁の委託事業の支援を受けて、2012年度以降、東北大学日本語学研究室が宮城県気仙沼市方言と名取市方言を対象に取り組んできた成果が存在する。しかし、会話量、記録地点ともまだ十分とは言えない状況であり、取り組みのさらなる拡張が急務と言える。さまざまな生活場面の中で、方言が実際どのように使用されていたのか、それを会話として残していくことは、被災地の方言を記録し、後世に伝えていくために非常に重要な課題となると考える。

また、(2)は、ここ数年、日本語学研究室が注力して調査研究を行っているものであり、今回はその分野を専門とする大学院生を中心に、学生たちが独力で調査を企画する形で取り組んだ。これらの分野は、全国の方言の中でも東北方言に特徴が色濃くにじみ出ており、言語としての東北らしさが際立つ分野であると言える。その点で、被災地方言についての記録は、今後も、オノマトペ、感動詞、言語行動といった分野の調査に優先的に取り組む必要がある。

さらに、(3)の課題については、方言が面的な広がりを持つものであることを考えた場合、特定地点の記録だけでは不十分であるという理由に根差すものである。方言の記録に残された時間を考えたとき、1地点を掘り下げるだけでなく、同時に、広範囲に渡って地理的分布を把握する取り組みも行わなければいけないことは明白である。方言の記録にとって、記述調査と分布調査はいわば車の両輪であることを忘れてはならない。

これらが小林氏の掲げる指針であり、本書の報告は一定程度、これらの課題に応えるものであったと言える。さらに、今回は学外の専門家も招き、音韻、文法、語彙などの伝統的な分野の調査も同時に企画したことで、大震災を挟んで、長いスパンで気仙沼の方言がどういった変化を遂げたかという点での記録にも貢献できたように思う。これらの報告の一部からは、伝統的な方言の著しい衰退が見えた。今後なお、その変化の実態を追うことが必要と言える。

そして、今回、学生たちが企画した調査には、社会の中での方言の実相を捉える実践的な方言学の分野も存在した。未開拓という意味では(2)の領域とともにさらなる研究の進展が期待される分野である。また、2023年12月の講演会でも「方言の活用」という演題で話題にしたが、これらの実践的な方言学の研究成果は、我々の研究と切り離せない、地域社会の人々の暮らしに資する可能性を秘めている。現に、2024年1月に発生した能登半島地震に際しては、かつて気仙沼市で配布した『支援者のための気仙沼方言入門』のノウハウを活かし、迅速に、県外から被災地に支援に入る人のための方言の解説のパンフレットを作成し、被災地の自治体に送り届けることができた（東北大学方言研究センターが運営する「東日本大震災と方言ネット」(<https://www.sinsaihougen.jp/>)でも公開)。この取り組みには、これまで築かれてきた方言研究の記述の蓄積と、まさに実践方言学を専

門とする学生（山田はるか氏）の研究の知見も活かしている。

研究者としての私も、地域社会に暮らす一人であり、その地域を良くしたいという思いがある。方言学にとって欠かせない地域社会を支え、豊かにする研究も今後求められる分野であり、その研究の展開が、専門性を活かした地域社会の還元につながることを、私自身も願ってやまない。

最後に、本書が対面調査による成果によって成ったことの意義についても触れておきたい。東北大学日本語学研究室では、2020年から2022年の3年間、本事業の調査をオンラインでの調査結果をもとにまとめてきた。それ以前には実施事例が稀だったオンラインでの調査研究の事例を蓄積し、その方法を確立したという意味では、その取り組みの意義は大きかったと考えられる。だが、今回、気仙沼市教育委員会の手厚い協力で、対面調査を全面的に実施することができ、調査員と話者の方々の交流のもとに、再びこのような調査研究の成果が結実したことは、さらに大きな意味を持つと思われる。仲間と議論して調査企画を立案し、話者の方々と直接コミュニケーションを取って回答を引き出し、泊りがけで協同作業の調査活動を経験し、そこで得た調査成果を発表してまとめるという一連の取り組みを行った学生たちには、3年間実施できなかった、調査団を組んでの対面調査を復活させる難題に取り組んだことで、それぞれ大きな成長と、調査地気仙沼への愛着とも言ってよい思いが芽生えたように感じるからである。こうした調査研究の取り組みは、このような教育的側面から見た意義も併せ持つことを改めて実感することになった。

このような背景で取り組んだ一連の成果を、気仙沼方言について、ひとまとめにした書を残すことで、全国の研究者・方言に関心を示す人々の注目を気仙沼に集めることができたなら幸いである。

中西 太郎

文化庁委託事業報告書
東日本大震災被災地方言の記録・継承のための調査研究 2

2024 年（令和 6 年）1 月 29 日 印刷

2024 年（令和 6 年）2 月 8 日 発行

編者 東北大学方言研究センター
発行所 東北大学大学院文学研究科日本語学研究室
〒980-8576 仙台市青葉区川内 27-1 TEL 022(795)5987

東北大学大学院文学研究科
東北大学方言研究センター